

新たにイナさんとロメリアを仲間に加えて、砂漠を進むあたしたち。

とりあえず、旅の目的は目の不自由なロメリアの目を治すこと。それを可能とする異能者を探すこと。

イナさんはそれに付き合う形で一緒に旅をしてきている。

それから砂竜アルファアの幼獣ルル。

ルルはロメリアの頭の上で悠々と過ごしている。すっかり懐いちやつてまあ。あたしより馴染んでないかい？

ダンベルギアの街を出て半日が過ぎた。

辺りはすっかり夜の闇に溶け込んでいる。

見渡す限りの砂漠の大地。

そこに三日月の淡い光だけがこの世界を照らしてくれていた。

この地方は夜も暖かい。陽射しがないだけでこんなに快適な気温になるんだ。

「ロメリア。おぬし眠そうじゃな？」

「うんうん？」

気が付くと、あたしとイナさんを挟んで歩いていたはずのロメリアがイナさんと共に少し後で立ち止まっていた。

さすがに体力の限界らしい。眠たそうにうつらうつらとしている。ルルなんてロメリアの頭の上で既に眠っている。

「もうバッグに戻りなよ」

「ルウ？」

今にもロメリアの頭から落ちそうなルルを掴むと腰のバッグに戻した。ここがルルの寢床でもある。まだ幼いからか、ルルは寝ている時の方が多い。

「ロメリア？」

「はくいく…くう」

こっくりこっくりやりながら返事をするロメリア。

寝るには少し早い時間だと思っけど、砂漠の旅で疲れたんだ

ろうなあ。

「シノ。ロメリアをおぶるから斬巖刀を持っててくれぬか？」
さらっとそんなことを言うイナさん。当たり前のように劍の柄をあたしに向けて差し出してきた。

本人にとつては当たり前のことかもしれないけど、イナさんの劍は大劍を超える超大劍だ。大人の男でも持ち上げられないのにあたしなんかが運べるわけがない。

「む、無理ですよお。それならあたしがおぶりますから！」

「ふむ。そうか？」

あたしはロメリアの前で屈むと、ロメリアは躊躇無くあたしの背中に身を預けた。

「ロメリア、大丈夫？」

「くう……」

「ありや。もう寝てるや」

まだ小さいから仕方ないか。

しかし熱帯に近いダンベルギアの街に住んでいただけのことはある。この暑さに一度も根を上げたりしなかった。

かくいうあたしもそろそろ休みたいと思っていたところだ。

休める時に休まないと、いざという時に動くことができなくなるし。

「さつきから見えておるのじゃが。あそこにあるのは村か？」
あたしたちはダンベルギアから西に位置するミットという村を目指していた。

イナさんが示したのはその道中、北の方角に見える村だ。

あたしもさつきから目にしてきたバックルという村だ。村と言っても、元・村だけだね。

「宿屋のおじさんに聞いたんですけど、あれは廃村らしいです。

オアシスが枯れて人が住めなくなつたとか」

この辺りの気候は特に暑い方だから。オアシスが無くては村として存続することは難しい。村はオアシスの近くに作るものだから。

逆に言えば元はオアシスが存在したということでもある。

オアシスもやっぱり枯れることもあるんだなあ。

「ふうむ。しかしここで野宿するのは心許ないのう。背中を預けられぬとソワソワするぞ」

「そうですね。じゃあ元・バックルの村に行きましようか。寝てる場所に風で砂が飛んで来ると煩わしいですし。風化していなければ建物とかはそのままでと思います」

いつ廃村になったのか聞いていなかったけど、遠目から見ても建物は確認できる。さすがにベッドや食べ物は期待できないだろうけど。ここで寝るより幾分かマシだ。

西へ進んでいたあたしたちは北へと進路を変え、元・バックルの村を目指すことになった。

視認できる距離とはいえ、到着までになかなかの時間を費やしていた。

さすがのあたしも体力の無いままロメリアを背負っては疲れる。でもイナさんはロメリアより確実に重たい鬼神斬巖刀を運んでいるんだ。

体の作りから違うのだろうか？ イナさんの顔に疲労の色は見られない。終始涼しい顔をしている。

「む？ どうした、シノ？」

イナさんに視線をやると、こんな具合にかなり早い段階で気づかれてしまう。

いざという時のために周囲へ気を向けているのだろうか。

「私の顔に何か付いておるかのう？」

「えくと。あんまり疲れて無さそうだなあとか思ったりして」

「ははは。私とて疲れもするぞ。この世界は他のどの世界とも違うからのう。常に陽の光に照らされておるし、砂漠もかなりの熱を持っておる。普段からこのような環境で旅をしているシノが凄いと思うほどじゃ」

砂漠を旅するのは根無し草の宿命みたいなものだ。あたしはもうかなり長いこと旅を続けている。

異能者狩りで両親を失ってから、帰る家も失ってしまったし。

親戚とかもいるはずだけど、あんまり覚えがないや。

それよりも、イナさんの語る他の世界というのが気になる。

「イナさんって、やっぱり別世界の人なんですね」

「ふむ、まあこのう……」

こことは違う世界から来たといナさんは以前に語っていた。

遙か遠い場所を意味しているんじゃない。世界そのものが違うんだと分かる。

それも異能の力なんじゃないかと思うこともあるけど。イナさんの口ぶりからとてそうは思えない。

別の世界から来たという話も、異能者のいるこの世界では特に不思議じゃない。

「別の世界のことなど、考えるだけ詮無きことじゃ。ここにいる以上、この世界で生きていくことだけを考えればよい」

「はあ。それもそうですね」

イナさんはあまり深く自分の世界の話をしようとはしない。そういうことそのものがタブーだったりするんだろうか。

それとも、あたしが羨んだりすると思っっているからだろうか。砂漠のない世界もあるんだって、もうイナさんの話から容易に想像できてるんだけどなあ。

あたしはそのことで悲観したり妬んだりしないと思う。この世界に生まれ落ちた以上、ここで生きていくしかないんだから。

「やつと着いたようじゃな」

そうこうしているうちに元・バックル村に辿り着いた。

廃村と言っても綺麗なものだった。今もまだ人が住んでいるんじゃないかと思うくらいに。

灯りが一切無いつてことはやっぱり誰も住んでいないということだろう。

ただ、夜の村というのはそれなりに不気味さをもし出している。夜の暗い闇が更にその雰囲気強めていた。

風が建物に当たっているのか、たまに聞こえるギギギという音も妙にあたしの恐怖感を刺激してくる。

「幽霊とか、出ないよね……？」

「シノはそんなものが怖いのか？」

幽霊が怖いというのは自分でもちよつと女の子らしいなんて思ったりしたんだけど。イナさんにはそれすらないらしい。どこまでも無敵だイナさんは。

「イナさんは怖くないんですか？」

自慢じゃないけどあたしは怖い。……ホントに自慢じゃないな。

「幽霊を、か？ 我が剣は『断てぬ物無し！』を motto にしておるからのう。例え幽霊でも斬れぬ気がせんのじゃ」

「斬れない気がしない、ですか」

斬る斬らないの問題じゃないんだけどなあ……。でも、イナさんらしいや。

相手が幽霊だろうとなかろうと敵ならただ斬り伏せるだけという単純な答え。

それができるだけの実力と自信が備わっているということだ。幽霊を斬れる自信がある人なんて他にいないだろうけど。

「そんなイナさんが羨ましいなあ」

「そうか？ シノも斬れるであろう？」

本当に斬れるのが当然のような感覚で話している。イナさんはどこまでもイナさんだなあ。

「幽霊を斬るなんて考えたこともないですよ」

よく幽霊に触られたり捕まえられたりしたという話は聞くんじるとは思えないし……。

でもイナさんなら幽霊すら両断する場面が容易に想像できてしまうから不思議だ。

そのうち空までバツサリ斬りかねないぞ。

「おぬしは少し自信というものが足りぬのう」

「幽霊を斬る自信がある人の方が珍しいですよ」

「そうではない。己の力量を見極めることは大事じゃぞ。そうでなくては水御華も不安になるぞ？」

「水御華が、ですか？」

水を生み出す刀、水御華。

ダンベルギアで雨を降らしてからというものの、あたしはまだ水御華から水を出すことができないでいる。

力を酷使したためだと思っていたけど、イナさんの言うように水御華が不安がつているのだろうか。

あたしは水御華を普通の刀と思えないでいる。

単に水が出せるからという理由からじゃない。いつだってあたしの意志に応えてくれていている気がするんだ。

もしかして今は休めって言っているのかもしれない。それとも、休ませろの方かな？

「しばらく水を操れぬというのも修行になっていいと思うぞ。剣技のみで勝ちを収めてみよ」

「勝ちを、ですか……」

イナさんはあたしの背中からロメリアを離すと、左脇に抱えた。

そして右手で鬼神斬巖刀を担ぐと、ニコツと微笑んでみせた。

「えくと、どういうことですか？」

「ロメリアがおっては満足に刀を振れぬであろう？」

「えっ、……ええっ？！」

イナさんは大きく息を吸い込むと、大きくハッキリとした声を響かせた。

「隠れても無駄じゃ！ このイナシルバチオボルダーン！ コソコソと姿を見せぬ者に遅れを取ったりはせぬぞ！」

その大声たるや鼓膜が破れるかと思うほどだ。

しかし、今はそんな場合じゃない。

「どこかに敵が？！」

あたしは慌てて腰の刀に手をやると周囲を警戒した。

今になって気がついた。あたしたちには殺気が向けられている。

それにしてもちやっかり名乗ってるなあ、イナさんてば。

「こおのゝ！ 恥ずかしがり屋めえ！」

「それは違うと思えますけど……。それにしてもロメリアはよく寝ているなあ……」

これだけイナさんが声を張り上げているのにロメリアはまったく起きない。よほど疲れていたんだなあ。

「まあよいか」

「えっ、いいんですか？」

「うむ。向こうは相手をする気満々じゃからのう。こちらが動けば付いてくる。付いてこれば自ずと姿を見せるじやろう」

「あっ。なるほど」

「向こうは離れ離れになった所を叩く作戦かもしれぬが、ところがどっこいじゃ。やつらの戦力も半減する。二人で十を相手にするよりも一人で五人を相手にする方が簡単じやろう？」

「……本当に簡単そうに言いますね」

口調は軽いけど、そんなことまですぐ考え付くイナさんはやっぱりすごいや。

でもそれに見合うだけの実力が無ければできない作戦だ。

平然と、まるで簡単なことのように言うイナさんに対して、あたしはできるかどうかと考えてしまっている。

こういう時、さっきイナさんが言った自信というものが、必要なんだろうなあ。

「でもイナさん。ロメリアを抱えたままで大丈夫なんですか？」

あたしの言葉に眉毛をピクリと動かすイナさん。

な、なんか怖い雰囲気……。

「ほほう。言ってくれたのう？ それならシノ。ロメリアを抱えたままおぬしも背負って戦ってみせようか？」

この人はどうしてこう挑戦的なんだろう。自信があるのはよく分かったけど……。

「そ、そこまでしなくても……」

イナさんに見てみたら実力を低く見られたように聞こえたのかも、決してそんなことはないんだけど。

右手に大剣と左手に女の子を抱えて戦えるなんて思えないのが普通だ。でもイナさんにはそれが失礼に当たるとは思えない。

それにしても、あたしを背負って戦っても負ける場面が想像できないのはさすがイナさん、としか言いようが無い。

「さあ乗れ！ すぐ乗れ！ 今乗れ！ おぬしを背負ってこの戦場を駆け抜けてみせるぞ！」

「すみません！ あたしが悪うございました！ だから普通に戦ってください！」

「ならば気張れい！ 水御華に頼らず己の剣技のみでここを凌いでみせよ！ ただ前に、突き進むのじゃ！」

「は、はいっ！」

あたしたちは刀を構えてバラバラに走り出した。

相手はすぐに発見できた。闇に溶け込みながら建物の影を走り来する人影。

静かな殺気があたしに向けられているのが分かる。

その人影は一つじゃない。あたしが向かってくるのを知ったせいか。そこから二人の人間が出てきた。

全身黒い格好で頭と顔にも黒いターバンを巻いている。体格からして男だろう。その手には刃物らしきものが握られている。

いかにも暗殺者という感じだ。

水御華を鞆の沙華月から抜くものの、やはり水が出る感じが

伝わってこない。

いつもなら意識していなくても抜刀時に水が滴り落ちてくるのに。

あたしは手前の男に先制攻撃を仕掛けた。

数が多いときはこちらが先手をとらないと！

「ハアアアッ！」

踏み込みの速度。抜刀から振り下ろしまでの流れ。どれをとってもバツチリだった。

相手を仕留めるに足る一撃だ。

まずは一人を仕留め、刀を返してもう一人の方へ……。

そう考えていたのも束の間。

ギインッ！

鉄と鉄がぶつかり合う音が耳に響いた。

あたしと男の間に、もう一人の男が身を挺して割って入ったのだ。

身を挺してといっても、その両腕に付けられた細く鋭いシールドであたしの刀をしつかりと受け止めている。

この訓練された動きは暗殺ギルドで間違いない。こいつらはこの村であたしたちを待ち伏せていたんだ。

「こおんのおっ！」

盾の男へもう一太刀浴びせるも、あっけなく後へ飛んで避けられてしまった。そうかと思いきや、それと同時にもう一人の男が同じように割って入りあたしに詰め寄ってきた。

男は右手のショートソードを水御華で受け止めると、すぐに左手のダガーが突き出されてくる。

剣を受け止めたまま体をひねってそれを避ける。

一人はその気になれば突き刺すことができるくらい先端が角ばっているシールドが二対。

もう一人はショートソードとダガーをその軽量を生かして巧みに攻撃してくる。

この両手に武器というのが嫌な印象をあたしに与えていた。ダンベルギアで戦ったベゼルⅡマージェスタを思い出さずにはいられない。

男のショートソードを力で押し退け、その隙に一太刀浴びせた。――が、または盾の男が割って入り、あたしの一太刀を受け止めてしまった。

防御に長けた人間が防御に徹しられることがこんなにも厄介だとは思わなかった。しかもこっちは刀一本に対し、あっちは両腕に盾。

攻撃はもう一人に任せているんだ。防御に徹することができないのも理解できる。

「ええい、もう！ 鬱陶しい！」

ヤケになったあたしは男のシールドに蹴りを入れてやった。

男はそれを受け止ることもなく、また後へ引いた。予想外の攻撃にリズムを崩したのか、もう一人の男も一旦引いた。

こんな戦いは初めてだ。なんてやり難い相手なんだろう。

あたしの攻撃を盾の男が防御し、その隙に剣の男が攻撃する。攻撃が失敗したらその隙を盾の男が補い、受け止めている間は剣の男が攻撃に転ずる。この繰り返しだ。

常に躊躇いなく前に前に出る戦法。

この狭い間合いの中、獲物がショートソードとダガー、両腕に装備されたシールドなのも頷ける。

つまり、リーチのあるあたしがこの中で一番不利なんだ。

特に刀は剣と違って相手を押しつぶすことに秀でていない。

あくまでも切っ先で相手を斬る武器だから。

割ってさえ入られなければあたしにとって一番いい間合いなんだけど……。

じりじりとあたしとの距離を詰める二人の男。

着ている格好も体格も似ているせいか、それも混乱を誘っている。夜というのも結果的に奴等の味方となっていた。

イナさんならどうするか。イナさんならイナさんなら――盾ごと両断している！ ダ、ダメだ！ 参考にならないっ！

防具ごと両断できるなら最初から苦勞なんかしていない。

あたしの刀は水さえ出なければ普通の刀と変わらないんだから。

どう攻めるか。それが問題だ。

あたしたちは互いに相手の出方を伺っていた。

次の一手を考えていると、砂漠を走る音がこっちに向かって

きた。

「シノ！ 大丈夫か？！」

暗闇の中、目で確認できるところにイナさんがやってきた。他に四人の敵を相手にしながら。

あたしたちの睨みあいが続いて刃のぶつかる音がしなくなつたせいかもしれない。心配して駆けつけてくれたみたいだ。

ロメリアを片手で担ぎながら、たった一本の剣で四人の敵に對して俊敏に對応している。

その四人ともがあたしの相手のような装備をしている。

盾の男が二人に剣の男が二人。盾が四つに剣が四つ。イナさんの腕一本で八つの腕を相手にしているようなものだ。

とてもあたしの心配をしている場合じゃないように見える。

「イナさん！」

あたしが叫ぶと同時に、目の前の男たちはそれを機に再び飛びかかってきた。

男たちは両腕を後ろに回して左右に動きながら向かってくる。これじゃあ、どっちがどっちか分からない！

最初は攻撃か、それともこちらに先手を譲って盾で防ぐつもりか。どっちが先頭に立つのか見極めなければならぬ。

盾の男が防いだらさかさかず剣の男が攻めてくるから――あつ、そういうことか！

「ええい！ ならば先手必勝お！」

言うや否や。あたしは盾の男に向かって刀を振り上げた。

盾の男は一步前に出てあたしの一太刀を受け止めようとする。そのために、防御のみに特化しているのだから当然だ。

あたしにとっては刀を振り下ろすには絶好の間合い。それはさっきの戦闘で男も分かっている。

振り下ろされるあたしの刀に、盾の男は腰を低くして両方のシールドを構え、確実に防ぐことを可能とした。

――が！ あたしは刀を振り下ろさず、更に一步前に踏み込んだ。

男との距離が更に縮まり、あたしより盾の男の方が有利な位置取りになる。

「何い？！」

盾の男と距離を詰められるだけ詰めて、あたしは刀を横へと

薙ぎ払った。

刀は盾の男の頭上をすり抜け、その右後方にいた剣の男の肩に食い込む。

「ウオオッ！」

手応えがあった。これで右腕は使えないはず。

剣の男へ攻撃すれば盾の男が防御に回る。けど、盾の男へ攻撃した時は盾の男は自分しか守れない。

そして次の一手に出ようとすると剣の男は前に出ている。あたしも前に出れば、そこは刀の間合いだ。

前へ前へ出る戦法に慣れていた結果、容易に刀の届く範囲に入ってきてくれたわけだ。

「クソッ！」

盾の男は両腕を突き出してあたしの体目掛けて盾を突き出す。

その手で来るには遅すぎる。

あたしは既に警戒して横へ飛んで間合いを離していた。

更に間合いを離すと盾の男は攻撃を繰り返してこなくなつた。

男は動かない。あたしの攻撃に対応しようと警戒を強めているのだろう。

しかし、それもそれまでのことだ。

「ふっ！」

次の瞬間には、あたしの刀が男の両腕の盾の間をくぐり抜け、男の腹に食い込んでいた。

「――ハッ、グアアッ！」

刀を引き抜くと盾の男は腹を抑えてのたうった。

出血は多いけど痛みを反して傷は浅いはずだ。内蔵も傷つけていない。

横槍さえ入らなければ攻撃に集中できる。

狭い間合いで反応できるよう小さい盾を選んだことが逆に仇となつたようだ。あたしの剣閃を追えぬまま、細い盾でカバーしきれなかった結果がこれだ。

残るは剣の男だけだ。

傷ついた右腕ではショートソードを構えることもできていない。左手のダガーだけでは勝負にならないはず。

あたしは水御華の切っ先を男に向けて言い放った。

「勝負ありだよね？ この人の傷は深くない。早く退いて治療

してあげなよ！」

剣の男は盾の男に視線を移すと再びあたしを見た。

その左手に握られたダガーを離し、盾の男の襟首を掴んだ。

——これでこっちは決着、か……。早くイナさんの所へ行って助太刀しないと……。ほっとしたのも束の間。

ぞわぞわと背筋に悪寒が走った。

見ると男の目はあたしを見て笑っているように見えた。

「シノッ！」

イナさんの声を聞いた。

そう思った瞬間、剣の男は盾の男をあたしに放り投げた。

「ええーっ？！　ちよ、ちよっど？！」

投げられた盾の男を思わず抱きとめてしまった。

盾の男の背中から妙な音と変な臭いがする。

この臭いは——火薬だ！

慌てて盾の男を引き離そうとするも、盾の男にはその覚悟ができているのか、あたしの服を掴んで離さない。

——暗殺ギルドってなんなのさ？　自分が死んでも相手を殺そうとするだなんて！

くそお。こんな時、水御華から水が出せたら……。

「離れておれ！」

イナさんの声を聞いた。

そう思った時、目の前でイナさんの着物がゆらめいていた。

「一刀両断ッ！」

あたしにしがみ付く盾の男の両腕が、イナさんの鬼神斬巖刀によつて盾ごと両断された。

盾の男は背中から地面に倒れ、砂漠の地面に埋めれると、ドオオオオンッという激しい音とともに爆発した。

大量の砂が大きく高く巻き上げられ、周囲の砂までも大量に吹き飛ばしていた。体に飛び掛る砂が地味に痛い。

その爆発から。相棒は巻き込まず確実に一人で一人を殺すつもりだったんだろう。こんなことをする人間の気が知れない。

しかし、それで終わりでは無かった。

男が爆発したところに大きな穴が空いてしまった。

砂漠ごと飲みこむかのように砂は穴へと流れ、穴はどんどん

広がっていく。

このままではあたしたちの足場も危ない。

すぐに離れようと試みた時。まだ村で潜んでいた敵が数人、あたしたちに一齐に飛び掛ってきた。

開いた穴の中へ引きずり込もうとしているのか。これは奴等の作った穴だったのか？

こんな時、水御華の力が使えたら水でまとめて吹き飛ばしてやるのに……。

ダメだ。さっきからできもしないことを願ってばかりだ。

「シノ！ 奥義を使うぞ！」

イナさんに何か考えがあるらしい。

未だロメリアを抱えたまままで鬼神斬巖刀を構え直した。

「は、はい！ お願いします！」

この一刻を争う時こそ、イナさんだけが頼りだ。

イナさんの奥義はまったく想像できない。

きつと物凄い技なんだろう。

あたしは安心して刀を構え、イナさんの奥義を待った。

「必っ殺あつ！ シノキャノン・スペシャル！」

どげしっ！

「あいつでええええええ？！」

腰のベルトの辺りを思いっきり蹴り飛ばされ、あたしはそのまま飛び掛る敵のうち二人を押し倒して突っ込んだ。

残りの敵は気にせず一齐にイナさんへと飛び掛かる。

「イ、イナさん！」

キイイイインッ！

イナさんは四方八方からの攻撃を、身を屈めつつ鬼神斬巖刀ですべて受け止めていた。

その刹那。ドガンッ！ という激しい音が辺りに鳴り響いた。

脆くなった所へ急激に押し掛かった人間の重みに耐えられなくなっただ。

地面は崩れ、イナさんたちは地面の下へと落ちていった。

「イナさん！」

慌てて駆け寄って穴を覗くも、夜の闇もあって底がまったく見えない状態だった。

とても昇れるような高さではないと分かる。

砂漠の下にこんな抜け穴を用意していたなんて……。

「シノお姉ちゃあん！」

ロメリアの声ができる。さすがにあの騒ぎでは目も覚ますか。

「大丈夫——？」

「シノ！ 後ろじゃ！」

振り返ると盾の男が二人、じりじりとあたしに近づいていた。まさかこの組み合わせで残るとは思わなかった。

それは向こうもそうらしい。なかなか攻撃しようとしてこないのがその証拠だ。

しかしこんな暗がりでもよく見えたものだ。さすがはイナさん。

「シノ！ 西じゃ！」

「え、なんですか？！」

イナさんの声に振り返ろうとすると、それを機に盾の男たちは同時にあたしに向かって飛び掛ってきた。

双方とも両腕の盾を同時に突き出し、上下左右からあたしに盾を繰り出す。

盾同士のコンビネーション。そういうのも想定して訓練されているみたいだ。

「そんなもの！」

あたしは大きく水御華を振った。

男たちの前で刃が一閃する。

しかし、水が出なければそれは単なる空振りにしかならなかった。

「しまったっ！ 水が出ないんだっ！」

今のあたしはただの人間だ。異能者として力を使いすぎたため、水御華から水を出すことができないんだっ。

こんな時にそんなことを忘れるなんて！

——まずいっ！

この機会を見逃すやつらじゃない。鋭く角ばった盾は容赦なくあたしの眼前へ突き出される。

首をひねってその一撃だけはかわそうとするも、他の攻撃は

避けられない。

繰り出される盾はあたしの体へと容赦なく突き立てられる。

：：かと思いきや、なんと男たちの攻撃は一つとしてあたしには届かなかった。

男たちは一斉に後ろに吹き飛んでいた。

「大丈夫だったね？」

あたしたちの間に割って入ったのは女の子だった。

女の子はいつの間にかあたしの前に出ると、左右の足で男たちの胸板を蹴り飛ばしていた。とんでもない運動神経だ。

「それとも大丈夫じゃないね？」

「え、ああ。ごめん、おかげさまで大丈夫だよ」

「そうね。それは良かったね」

ニコツと八重歯を見せて笑いかける女の子。思ったよりも若そうだ。

栗色の髪と左右のもみあげ部分に民族的な髪飾りが特徴的で、服装も民族的なものを匂わせる薄地の格好をしている。

そのあどけない顔立ちからあたしよりも年下だと分かるものの、それとなく発育している胸を見ると、世の中ふびよーどーだなーとかなんとか思ってしまう。

「いくら武器が多くても人数は変わらないね。ちゃんと見極めないところの世界じゃ生きていけないね」

女の子はそう言って腕を組むと、チツチツと指を振ってみせた。この子はこういうことに慣れてるんだろうか？

「いやあ。分かってはいるんだけど、やっぱり普段と違う戦い方をするもんだからね：：ってそんな場合じゃないや！」

男がもう一人の男を立ち上げらせ、あたしたちを前にして構え直した。どこまでも集団戦法を使うつもりか。

「こいつらインフィニットの暗殺ギルドね」

「えっ：：？」

そうだ。こんなことに見知らぬ女の子を巻き込んじゃダメだ。下手をしたらあたしの仲間だと思われて一緒に狙われてしまうかもしれない。

あたしはいきり立って女の子の前に立つと、男たちに向かって刀を向けた。

異能者のあたしを狙ってきたんだ。この子を巻き込むわけに

はいかない。相手になるのはあたしだ！

「さあ、どこからでもかかって来おい！」

すると、なぜか女の子はあたしの横に立つ。

「ごめんね。巻き込んでしまったみたいね」

「えっ？」

——この子。自分が巻き込んだと思っている。ひよっとしてインフィニットに狙われる側……異能者？

女の子は悲しそうに笑うと次の瞬間、男たちの方へ駆け出した。

「てりやああ！」

標的を一人に絞り、一気に間合いを詰めて蹴りを繰り出す女の子。

しかしその蹴りは割って入ったもう一人の男の盾によって防がれてしまう。敵はあくまでもこのスタイルを貫くつもりか。

とことん相手を守ることに特化しているらしい。

確かに自分の視界で見えるより第三者の目で見たほうが視野も広いし的確に守ることができる。理に適った戦術だ。

それでも女の子は構わず攻撃を続けた。

「ちよいつ！」

女の子の二度目の蹴りが盾で防がれると、女の子はうねるようにその腕に足を絡みつける。そのまま体全体をねじると、男はあっさりと地に伏せられてしまった。

そして相手の体を這うようににゆるっと背中に回ると、男の首に腕を絡めてあっさり意識を飛ばした。

「ホイ。まず一人ね」

蹴りが盾によって防がれてからほんの数秒の出来事だった。

女の子のそれは武器を必要としない体術だ。

滑らかで自然な挙動には引き付けられるような魅力がある。

盾の男の両腕が武器なら、この子の両手両足、体のすべてが武器と言えるかもしれない。

「くっ！」

残った男は女の子に向かって盾を突き出そうとした。

でもそれは違う。男が狙っているのはやられた男に背負わさ
れている爆弾だ。

「させないよ！」

あたしはすぐに駆けつけて刀を振るった。が、男はあたしに気づくとあっさりとそこから離れてしまう。

「むなしく空振るあたしの刀。今日はちつともいい所が無い。仲間の命まで武器にするあんたたちに言っても無駄かもしれないけど、これ以上やっても無駄だよ。命を無駄にして何の得があるのさ！」

「……」

男は答えない。一步後ろへ下がり、また一步後ろへ下がるとあたしの方をじっと見つめた。

「逃がしちゃうのね？ また殺しに来るね！」

「そうかもしれない。でも、もしかしたら来ないかもしれないじゃない？」

もしかしたらというより、できれば本当に来て欲しくない。命を狙われるのなんてちつともいい気分じゃないから。

「ウチにはそんな考え方できないね。ウチは異能者だから、何度も何度も殺されかけているね」

そっか。やっぱりこの子は異能者なんだ。だからあたしを巻き込んだと思っていたんだ。

あたしがこの子を異能者だと分からなかったように、この子もあたしを異能者だって分かっていない。

それでもインフィニットは異能者を狩る。どうやって区別しているかは分からないけど。確たるなにかがあるようだ。

「あ。行っちゃうね！」

女の子の言うように男は一人で逃亡してしまった。そばで横たわる仲間を置き去りにして。

ベゼルにしろこいつらにしろ。暗殺ギルドの実力はとんでもない。できればもう関わりたくないなあ。

「ふう。疲れた」

その場に腰を下ろすと、いつの間にか女の子もあたしの横にしゃがんでいた。

不思議そうにあたしを見回し、スンスンと匂いまで嗅いでくる。まるで動物のようだ。あたしにはそれが可愛く感じる。

動物とか小さい女の子にはよく懐かれるんだ。

「ね？ お姉ちゃんも異能者なのね？」

「うん。一応ね」

異能者も異能者を嫌う傾向があるけど、この子はそうじゃないみたいだ。とても人懐っこい顔を覗かせている。

「あたしはシノⅡカズヒ。砂漠を旅してるんだ」

「シノⅡカズヒ、ね。ウチはメルセレスⅡシュトラーク。みんなはメルって呼んでるね」

「みんな？　ってことは一人じゃないんだ。メルちゃんは」

「メルでいいよ。シノちゃん」

「うん？」

メルは呼び捨てでいいって言ったのに、あたしのことはちゃん付けで呼ぶんだ？

なんか変な感じだな。でもまあいいか。なんだかそれがメルらしい気がするし。

「メルの体術はすごいね。誰から習ったの？」

「ウチはじーちゃんに教えてもらったね」

その場でブンブンと拳を振るうメル。

冗談抜きでその素振りには目にも留まらぬ速さ。暗殺ギルドを倒せるという実力は本物のようだ。

「へえ。おじいさん強いんだね」

「うん！　じーちゃんはウチらの中で一番ね！」

よほどそのおじいさんが好きなんだろう。メルの顔が今までで一番綻んでいる。

あたしのおじいさんやおばあさんはいるのかな？　生前の両親から聞いたことが無いや。

「シノちゃんは異能者なのね？　何ができるね？」

「うーん。今は何にもできないんだ」

ダンベルギアの街に雨を降らした——なんて言ってる信じてもらえるかな？　おかげで今は異能者としての力がカラッポだ。

それなのに暗殺ギルドの連中に狙われたってことは、異能者だからじゃなく、あたしをシノⅡカズヒと知って狙ったってことになるのかな？

これはますますあたし個人がインフィニットに狙われていると考えることができてしまう。いわば一大国家を敵にするようなものだ。

それもこの広大な砂漠を前にすると小さく見えるけどね。フードで顔を隠せばなんとかなるだろう。

そういえばメルも異能者だって言ってたけど……。
さっきの戦いを見るとそんな風には見えない。戦う異能者が
戦いにその力を使わないのも珍しい。

「あのさ。メルはどういう異能者なのかな？ 答えたくなかつ
たらいいんだけど……」

あたしは少し躊躇しながらそのことを問う。

異能者の中には自分が異能者であることを否定したい人もい
る。メルからはそんな感じはしないけど、下手に聞いて怒らせ
たことが過去にあるからなあ。

「ウチはねえ」

メルはそつと目を閉じると耳に手をやった。何かを聞くよう
な素振りをしているのは分かる。

あたしもメルのように耳を澄ませてみるも、特に変わった音
は聞こえない。メルは何を聞いているんだろう。

「何か聞こえる？」

「うん。聞こえるね」

「メルには何が聞こえているの？」

「ウチにはね。砂漠の音が聞こえるね！」

「砂漠の……声？」

それは凄い。こんな広大な砂漠の音が聞けるなんて神にも等
しいように思える。

世界の大半を占めるこの砂漠が、いったい何をメルに伝えよ
うとしているんだろう。

あたしは地面の砂を掴むと地面に振り撒いた。

「この一つ一つから声がするのかな？」

「それはうるさそうね。砂漠の声は一つね。この一つ一つから
も声は聞こえるかもしれないけどね。砂漠はほとんどみんな同
じ意志ね。どの砂漠に聞いても同じ答えが返ってくるね」

「例えば今、砂漠はなんて言ってるのかな？」

メルは再び耳を澄ませると、砂漠の声を聞いたのか。クスッ
と笑った。

「暗い、って言ってるね」

「夜だから？」

「たぶんね」

砂漠に目があるんだろうか。それとも目が無くとも視えてい

るのかな？ もっと神々しい言葉を期待していたんだけど……。
「普段はなんて言ってる？」

「暑いって言うね」

暗いとか暑いとか。砂漠はなんて大雑把なんだろう。

そんなこと聞いてるメル的身にもなつてもらいたいものだ。
常に聞かされてるっていうよりもメルが聞きたい時に聞いているようだからいいけど。最初からそうだとは限らない。メルだって自分の能力に悩んだりしたと思うから。

「ね？ こんな風に砂漠の声が聞こえるね」

「あはは。まさか砂漠が暑がってるとは思わなかったよ」

「うん。ウチらも暑いもんね」

確かに砂は太陽の熱を帯びて熱くなるけど……そっか。昼間の熱い陽射しも、砂漠は好きで浴びてるわけじゃないのか。

世界が砂漠だらけになった時、砂漠はなんて思ったんだろう。仲間が増えたとか、かなあ？

もしもメルの聞いている言葉が砂漠じゃなくてこの大地のすべてだったとしたら、きっと悲しんだだろう。緑豊かな自然が砂漠になってしまったんだから。

緑豊かという大きなオアシスくらいしか想像できないけど。砂漠じゃない世界ってそもそもどんな姿をしていたんだろう。

緑豊かだったという伝承はあるけど。もう二百年以上もこんな世界だから今じゃ誰も知らないんだ。

「逆にさ。メルは砂漠に言葉を伝えることはできるの？」

「それはできないね。踏んだり潰したりしてもイタイって言わないね。ウチらには砂漠に何かをすることもできないと思うね」
暗いとか暑いとかは言うのに、痛いとかは言わないんだ。

砂漠が発する言葉の基準が全然分らないや。

「ふーん。水を与えて見てもそうなのかな？」

「水ね？ シノちゃんは何ができるの？」

「あたし？ あたしは——」

この刀、水御華を使って水を操ることができる。
そう言いかけたところであたしは口をつぐんだ。

「これは——?!」

ゾクゾクする背筋。凍てつくような視線。急激に押し寄せる緊張感があたしを飲み込んだ。

——間違いない。アイツだ。アイツしかいない……。

「シノちゃん？　どうかしたのね？」

辺りを警戒すると、そいつは堂々とこちらを見据えていた。

同じ暗殺ギルドのベゼルⅡマーjestタ。

その腰には二本の剣が携えられている。

あたしの視線を感じたのか、ゆっくりとこちらに向かって歩みを進める。

「あいつ、悪いヤツね？」

「ダメだよメル。あいつと戦っちゃダメだ」

「でもウチらを殺すつもりね。きつと暗殺ギルドね。それにシノちゃん、すごく辛そうね。あいつに酷いことされたね？」

あたしは知らず知らずのうちに自分を抱いて震えていた。

それでもベゼルから目を離せない。あいつの一挙一動を見逃すことが怖い。

押し掛かるプレッシャーは半端なものじゃなかった。

まだあたしの中にはベゼルに対する恐怖が渦巻いている。

右腕を斬り飛ばされかけたこともあれば、斬り殺されかけたこともあるんだ。あの時の光景が嫌でも思い出してしまふ。

それに今は水御華から水が出せない。剣術だけであいつの相手をするなんてこと、できる気がしない。

かといって、ベゼルから逃げることもできるとも思えない。

「シノちゃん……」

「大丈夫。大丈夫、だよ」

そんなあたしの言葉も震えていたら説得力というものが無い。でも、怖いのだ。あんな男とまた戦わなくちゃならないという

事実が……。

「あいつはウチが倒すね！」

「あつ！　ダメだよ！　メル！」

腕を伸ばすもメルには届かない。

ベゼルに向かって駆け出すメル。

そのスピードは体術に心得があるだけあつて速い。

「……」

ベゼルは無言のままメルに視線を送った。

興味もなにもない冷たい目。

ぐつとベゼルの肩が動いたと思った刹那、ベゼルは両手に剣

を握っていた。

完全に臨戦態勢だ。ベゼルが剣を持つだけで威圧感が増幅されるみたいだった。

それでもメルは構わずベゼルへ向かって飛び掛る。

「チヨイナア！」

大きく宙を舞うメル。

そこはベゼルの間合いの外、ということとは素手であるメルの間合いの外でもある。その目前で、メルは砂漠の地面に向かって大きく足を払った。

「砂よ轟くね！ 砂渡波舞（サンド・ウェイブ）ね！」

メルの蹴りが膨大な砂という砂を押し上げ、波となってベゼルの襲い掛かる。

砂のカーテンがベゼルの体を隠しているため、その動きはこちらからは見えない。

けれど、あたしには次にベゼルがどういう行動を取るかわかっていた。

押し上げられた砂の波はベゼルによって×の字に斬り裂かれ、パラパラと元の砂漠へ戻っていく。

「チョア！」

未だ砂が舞う中、身を屈めて砂にその姿を消していたメルがベゼルの攻撃後の隙を狙って蹴りを繰り出していた。

真正面からというのはメルらしいのかもしれない。けれど、それで倒せるほど甘い相手じゃない！

あたしは急ぎメルの所へ駆け出していた。

メルの蹴りを剣で受けようとするベゼル。もちろん剣で受ければ素足のメルにダメージが行く。

しかしそれがわずかに間に合わず、メルの蹴りでベゼルの右の剣が手から飛ばされた。

それでも薙ぎ払われるベゼルの左の剣がメルの髪をかすめる。この隙に更に蹴りを食らわせようと踏み込むメル。

「チェイツ！」

この時はじめてベゼルの目が光を見せたような気がした。

ベゼルの右腕が動いたところであたしはその危険を感じる。

「メル！ 危ないっ！」

ベゼルの払った左の剣がそのまま飛び込んできたあたしに向

かって伸びる。

それを水御華で受け止めると同時に、あたしはメルを腕を掴んで思いっきり手前に引き寄せた。

「えっ?!」

ベゼルの右の剣がメルを居た場所に振り下ろされ、地面の砂を大きく巻き上げていた。

あたしとメルは既にベゼルから大きく間合いを離している。

メルはあの早業を前に目を見開いていた。

「あっちの剣、ウチが飛ばしたはずね……?」

「ベゼルは左の剣を振るいながらメルに飛ばされた右の剣を後ろで掴んでいたんだよ。メルからは死角になっていると知りながらね」

もしかしたらベゼルはその気になればいつでも飛ばされた剣を掴めたのかもしれない。そうしなかったのはメルを誘うため。それくらいのことはおかしくない男だ。

「ウチは……斬られていたね? 殺されていた……ね?」

悔しそうに唇を噛むメル。

そこにはあたしのように恐怖は見えないけれど、ベゼルの実力を身に染みて感じとつたらしい。

メルはさっきのようにすぐに攻撃しようとはせず、どう戦うか考えているように見える。

二対一だというのに有利さが微塵も感じられない。

相手が双剣使いだからということだけじゃない。

ベゼルの周囲には冷たい空気が張り詰めていて、近づけば近づくほど寒く感じるんだ。

それは確実に相手を殺すという殺意と、必殺の間合いから生まれる冷気。悪寒。決して踏み込んではいけない剣の結界。

こういう人間は他に知らない。唯一無二の殺人鬼だ。

「シノちゃん。どうすればいいね? どうしたら勝てるね?」

メルの体術はすごい。けど、攻撃の間合いは一番狭い。

ベゼルの二本の剣を受けずに避け続けて、懐まで入らなければならぬ。

メルもそれが分かっているから迂闊に近寄れないんだ。

二対一でも武器の数はベゼルの方が上だ。

水御華から水が出る感覚がまったく伝わってこないし、現状

ではこのまま戦うことしかできないか……。

——いやいや、そんな考えがダメなんだ。さっきもメルが四本の突き出す盾を前に足二本で相手をしていたじゃないか。

相手の剣は二本。でも、……ベゼルは一人なんだ。

「シノ||カズヒ……」

ここにきてやつと口を開くベゼル||マーjest。

狙いはやはりあたしか。

それに刀である水御華もまだ狙っているかもしれない。

「なんであなたがここにいるのさ！」

あたしは声を振るい上げていた。

さっきのように震えていないのが自分でも不思議だった。

「貴様。なぜ水を使わない？」

やっぱりあいつの興味はあたしじゃなくて刀の水御華だけか。

それなら意地でも答えてなんかやるもんか！

「さっきのヤツらの仲間なの？！」

あたしは逆にベゼルへ質問した。

「それで勝てるでも思っているのか……？」

当然。ベゼルがあたしの言葉に答えるはずがない。

それがますます気に入らない。

「あたしが一人になるところを狙ってきたなあ？　この卑怯も

んっ！　それでも暗殺ギルドか！」

「ちよつと、シノちゃん」

メルはいつの間にかクイクイツとあたしの袖を引っ張っていた。

「会話が噛み合っていないね」

「いいんだよ。だってベゼルは人の話なんか聞かないんだもん。

一方的に話しちゃってさあ」

「今のシノちゃんもそうだったね……」

ベゼルはあたしにはなく水御華の方にしか興味がない。

だからあたしの言葉に答える気なんてないんだ。会話が成立するはずがない。

それだけ自分の実力に自信があるんだろう。一分後には死んでる相手と話す必要は無い。なんて考えてそうだし。

だからか、少しムキになってしまった。

「なんであたしを狙うのかくらい話してくれてもいいのに」

「数秒後に死ぬ運命の者と、言葉を交わす理由など無い」
一分後じゃなくて数秒後だったか。

くっそお。完全に小物扱いだよ。嫌なヤツ！
でもこうして話してみるとベゼルに対する恐怖よりも悔しさと鼻を明かしてやりたいという気持ちの方が強くなっていった。

この男にだけは絶対に負けたくない！
イナさんならきつとベゼルのやつつけられる。イナさんを目指しているのなら戦え、シノカズヒ！

「よおーし！」
あたしは刀を構え直し、ベゼルを見据えた。

「メル。さっきの技、もう一回できる？」
「できるね。でも、同じ技が通用する相手とは思えないね」

並の人間ならともかく、ベゼルが相手なら尚更そうに違いな
い。同じ技をまた食らってくれるほど気の効いたヤツでもなさ
そうだし。

でも、たった一回でその技のすべてを見抜けるはずもない。
同じ状況下で無ければ、また違ってくるはず。

メルと力を合わせることでこの場を凌ぐことができるはずだ。
「今度は二人で行くから、あいつを出し抜ける。きつと大丈夫
だよ。メルの技はすごいもん」

あたしの言葉にペアと明るい顔をするメル。
「こんなメルを危ない目にあわせるわけにはいかない。

「うんっ！ わかったね！」

二人なら大丈夫だというものでもないけれど。メルはあたし
の考えに力強く頷いてくれた。

メルもあたしと同じく殺されてなんかやるもんかという思い
がある。

それはむしろあたしより強いかもしれない。そのせいか、あ
たしもメルのように足掻きたくなっていたのだ。

——絶対に、負けない！ 負けたくない！！
「行くよ、メル！」

「オツケーね！」

あたしたちは同時にベゼルの元へ駆け出した。
大きく水御華を払い、ベゼルに向かって叫んだ。

「ベゼル！ 水御華の本当の力、見せてあげるよ！」

「……」

ベゼルの視線がわずかに水御華のほうへ動くのがわかる。この刀剣マニアめ！ それに足元をすくわれたらいいんだ。あたしは明らかに遠い間合いで刀を抜くと高らかに掲げた。ベゼルは双剣を握ったままピクリとも動かない。あたしの技を繰り出した後でも充分に反応できると思っているんだ。

「水よ唸れ！ 奥偽・水刃の太刀！」

上から下へ、水御華の剣閃が空を斬り裂く。

ベゼルの目は確かに刀の切っ先を追い、それに対して僅かに体を強張らせた。

あたしは異能者として力を失ったままだ。水御華からは当然、水など出やしない。だからこそ奥義ではなく奥偽なんだ。

しかしベゼルには水が出るかどうかなんて分かるはずがない。これまで、ここぞという時に水を使っていたことにベゼルだって気づいているはず。

だからこそ、迷いが生まれる。

水御華の切っ先から水は出なかったという、その何も起こらないことにかえって警戒が強まる。

ベゼルの両腕がわずかにビクつき、動きに迷いが生じた。

刀剣マニアであることがヤツの死角。そこが勝機だ！

「メル！」

「砂渡波舞（サンド・ウェイブ）！」

水御華から水は生まれなかった。その結果と同時にメルの放つ砂の波がベゼルへ追い討ちをかける。

わずかに判断を見誤った結果、頭から大きく砂を浴びるベゼル。

両方の剣で砂の波を斬ろうとするも、押し寄せる砂の質量を前に、完全に動きを鈍らせていた。

この隙を逃すあたしたちじゃない！

「覚悟！ ベゼル！ マージェスタ！」

身を低くして刀を突き出すあたし。

これなら長身のベゼルが剣を薙ぎ払っても避けられる。間合いに入ったら水御華を斬り上げればよしだ。

あのベゼルⅡマージェスタに対し、勝ちを得ることができた。
あたしたちの勝利だ！
そう確信していたのも束の間。

「あつ！ シノちゃん！」
メルは両足をあたしの肘に絡めると、体をひねってあたしの体を地面に落としてしまった。

「うわああっ?!」
まっすぐベゼルに向かって突撃していたのに、メルによってあっさり動きを止められるあたし。

メルの行動が理解できないあたしは混乱していた。

「どうして?! 何が――」
メルに向かって叫んだと同時に、ベゼルの足元から巨大な何かが飛び出してきた。

ゴバァァァァァ!

「クチ? 巨大なクチだ!」

砂漠ごとベゼルを飲み込もうとする巨大なクチが砂漠の下から飛び出してきた。

ベゼルはというと、後ろへ数歩下がってそれを難なく回避していた。

大きな口はそれだけで2メートルはありそうだ。あんなものに噛み付かれたら無事じゃ済まない。

メルが止めてくれて本当によかった。

「ありがとうメル。なんで分かったの?」

「砂漠がね。何か来るって教えてくれたのね」

「そっか。じゃあこの変なのは砂漠にとってもイレギュラーなんだね」

その巨大なクチはガチガチと歯を噛み合わせて獲物の味を確かめているようだった。

しかし、そのクチから溢れ出るのは砂漠だけ。

あたしもベゼルも食べられないのだから当然だ。

クチの先端にある岩のようなものから二本の空気が吹き出る。見る限りあれが鼻のようだ。鼻をヒクヒクと動かし、獲物を探しているみたいだった。

「あれは何だろう？ ガンマルマっていう岩竜（がんにゅう）にも似ているけど……」

暗がりでは体の色がハッキリしないけれど、あの形態は砂漠で何度か見たことがある。

砂竜アルファルファが空を飛ぶ竜なら、岩竜ガンマルマは砂漠という海を泳ぐ竜だ。

普段のガンマルマは砂漠の中から鼻先を出すことで岩に擬態化して獲物を狩っているけど、こんな風に狙って飛び出してくることはありえない。

「シノちゃん。あれはガンマルマの魔種ね」

「魔種？ もしかして魔獣のこと？」

世界が完全に砂漠へと変わった時、突然変異で生まれたといわれるドラゴンたち。その中には人間を襲う種族もいた。

見た目が他のドラゴンと変わらないのに性格がかなり凶暴なため、亜種ではなく魔種と呼ばれている。

近年では魔獣という言葉の方で統一されつつある存在だ。

他のドラゴンたちは人間に対してとても友好的なのに、魔獣たちは人間のことを敵視している。

魔獣に殺された人間も少なくは無い。

「ガンマルマの魔種か。初めて見るよ」

「岩竜の魔種、磐竜（ばんりゅう）デルタルタと言われているね。あいつは好戦的で誰彼構わず噛み付いてくるね」

ガンマルマは人を襲わない。砂漠に潜って狩りをする常態にない限りは。

それに比べてこのデルタルタはどうか。明らかにベゼルの足元に忍び寄ってきていた。

魔獣がなぜ人を襲うのかは解明されていない。

しかも成獣の竜たちの鱗は並の剣士じゃ歯が立たないくらいの強度を持っている。体も大きいだけにやっかいな相手だ。

剣が通じないという点ではベゼルも同じはずだけど……やはり興味のない目で目の前のデルタルタを見ている。

どうせ『俺の方が強い』と敵にも見ていないんだろう。どこまでも自尊心が強いやつだ。

「……忌々しい魔獣どもめ」

目の前のデルタルタではなく、視線を上に向けてそう呟くべ

ゼル。その視線の先には何かが翼を広げて飛んでいた。

空を旋回する黒い影。あれは砂竜アルファルファだろうか。

それにしても尻尾の形状が違うような……？

「……シノⅡカズヒ」

「あっ、えっ？」

急に名前を呼ばれたもんだから驚いてしまった。

ベゼルを見ると恨めしそうな目であたしを見ていた。

こうなったのはあたしのせいじゃないんだけどなあ。

ベゼルが標的としてではなく人間としてあたしを見ることは稀だ。だから普通に見つめられるとなんだか変な気分になる。

「次こそ、その水御華の力、見せてもらうぞ……」

言うや否やあたしに背中を見せるベゼル

「え、ちよっと！」

——あのベゼルが退く？

そう思う頃にはベゼルの姿は無い。

珍しいこともあったもんだ。あのベゼルが退くなんて……。

そこにはビクビクと体を揺するデルタルタのみが残る。

「ガッガッ！ ガアアアアアアアウ！！」

咆えるデルタルタ。その巨大な口は×の字に斬り裂かれ、残

った体は血を噴き出しながら砂漠の中に沈んでいった。

「き、気持ち悪い！」

おそらくベゼルが斬ったのだろう。デルタルタが死角になっ

ていたせいとその瞬間は見えなかった。

いや、もしかしたらあたしたちが攻撃しようとした時を狙っ

たものだったのかもしれない。そう思うとゾツとしてしまう。

けれど、今となってはそれを確かめる術は無い。

こんな簡単にデルタルタを倒せたなら、なぜベゼルは身を引

いたのだろうか。

そのままあたしに斬りかかって来ればいいだけなのに。

そしてドラゴンの硬い鱗を斬り裂くことができるということ

は、ベゼルは並みの剣士ではないという証になる。

やっぱり、油断できない相手だ。

「シノちゃん。なんだか様子が変わね」

メルが暗い空を指差すと、そこにはさっき見た黒い影が咆えていた。

「グウ〜ルルルルル…」

そのままゆっくりとこちらに近づいてくる。

あれはアルファアルファじゃない。アルファアルファはもっと優しい顔をしているもん。

あたしは思い出した。

砂竜アルファアルファの魔種の存在を。他の魔獣とは一線を画す身体能力と知能に長けている魔獣。

その名は、邪竜（じやりゆう）ベータルタ。

人間と同じ環境を好むアルファアルファを天敵としているため遭遇率はかなり低かったけど、ここはオアシスから見捨てられた廃村。ベータルタにとってここはかつこうの場所なんだ。

ベータルタがいたからベゼルが退いたのだとしたら、ベータルタとの戦いはかなり厳しいものになるのだろう。

邪竜ベータルタ。いったいどんな魔獣でどんな攻撃を仕掛けてくるんだろう…。

「気をつけるね！」

メルの声でベータルタの変化に気が付く。

大きな口で息を吸い込み、頬を膨らませている。その口から何か出るのは間違いない。

「ゴッバアア！」

ベータルタの口から大きな炎の息吹（フレイム・ブレス）が放たれた。息吹と言うには炎が大きすぎるくらいだ。

あたしとメルはそれぞれ別の方向へ避けるも、炎の息吹（フレイム・ブレス）は容赦なくメルの方へ伸びていった。

息が続く限り放たれるのだとしたらかなり厄介だ。

そっか。剣が届かなきゃいくらベゼルでも戦いようがないのか。

こういう時こそ一時休戦して共闘しようって考えには…：：ならないんだろぅなぁ、やっぱり。

「アチチッ！ 鬱陶しいね！」

ひたすら逃げるメルと炎を吐き続けるベータルタ。

このままにはしてられない。相手が火ならこっちは水だ！

「水御華！」

遙か上空のベータルタに向かって刀を仰ぐ。――が、やはり水御華からは一滴の水すら出てくれなかった。

こんなに水御華が自由にならないのは初めてだ。
こういう時だけ異能者としての力を求めてしまう。あたしは
なんて都合のいい人間なんだろう。

「ああもう！ まだあたしの力が足りないの？！」

あたしは水御華を鞘に納めると、その辺りに転がっている石
を掴んでベータルタに向けて投げつけた。

カコンッ！

石は見事に命中！ しかし、石はまるで硬い岩にあたったか
のような跳ね返りを見せただけだった。

ベータルタの意識はまだメルの方へ向けられている。

「メル！」

「来ちゃダメね！」

メルは更に速度を上げて走りだし、ベータルタとの距離を離
す。この砂漠の地面であの速度は凄い。

しかしベータルタも翼を羽ばたかせると更に速度を上げ、あ
つという間にメルを追い越してしまった。

メルがそれに気づく前にベータルタは口を大きく開け放つ。

——まずい！ メルが！！

「ルウ！」

「えっ、ルル？！」

いつの間にかルルが腰のバッグから飛び出してきた。

ルルはあたしの肩へよじ登り、そこから頭のとっぺんへ飛び
乗った。

いつもにも増して竜らしく声を上げるルル。

「ウウウ、ルルルルルル！」

ルルはあたしの頭の上でベータルタを威嚇した。

その鳴き声はそばにいるあたしの耳をキーンと響かせるくら
い大きいものだった。

「ルルルルル！」

「ちよつと、ルルってば！」

頭の上のルルを捕まえるとルルはあっさり鳴き止んでしまっ
た。ぷへつと疲れたように咳を払うルル。

ルルがこんな行動をしたのは初めてだ。

ベータルタの方を見ると、その顔はメルではなくあたしに
向けられていた。

アルファルフアであるルルの声に反応したからだろうか。かなり嫌な予感がするあたしはルルをバッグの中に仕舞いこんだ。

すると次の瞬間、ベータルタの眼が妖しく輝いた。

甘ったるくて酔いそうな感覚があたしの中に飛び込んできた。

「えっ！ あれっ？！ から、だ、が……？」

——動かない。首から下の感覚が一切ない。

まるで動かし方を忘れたように身動き一つ取れなくなっってしまった。

これもベータルタの力なのか？ これってまるで異能者じゃないか！

ベータルタの口から炎が漏れる。

「シノちゃん！」

まじっ！ この状態で炎を吐いたらどうすることもできない。動け！ 動け！ あたしの体！

「ゴッバアアア！」

ベータルタはあたしに向かって炎の息吹（フレイム・ブレス）を放った。

巨大な炎の前に、あたしは成す術が無い。

このままではこの身が焼かれる。

焼け死んでしまう。

そんなの嫌だ。

あたしにもっと力があれば。もっと、もっとも……！！

「水御華あ！」

リイイイイイイン……

水御華から何か音を聞いた気がする。

その音はあたしの耳から頭の中へ木霊すると、ピリピリした緊張感がモヤモヤとした感覚へと移り変わる。

あたしは降りかかるベータルタの炎の息吹（フレイム・ブレス）を虚ろに見つめていた。

成す術なんて無いはずなのに。あたしは無意識のうちに刀を握っていた。そうすることがまるで自然なように。

モヤモヤした意識の中、降りかかる炎の波に嘲笑していた。

心の底からくだらないものだと思えてくる。

「そんな炎なんか――」

鞘から水御華を引き抜く。

鞘を持つ左手がぐっしより濡れてしまいうくらいに水が溢れ出てきた。

「この水の前に通用するもんかああああ！」

振りかかる炎の息吹（フレイム・ブレス）に水御華を振り下ろし、炎の塊を両断した。

じつという焼ける音が頭の上でする。

その刹那。水御華の刀身から膨大な水が噴射する。

「いっけええええ！」

放出された水は太い滝のように荒く飛沫をあげて炎を消し去っていく。

そして水はそのままベータルタに向かって駆け上っていく。

「ガアルルウ！」

膨大な水の勢いに押されたベータルタは空中でバランスを崩し、一時的に飛行を阻んだ。

ぐらりと体を傾けるベータルタ。

驚きよりも怒りを露にしている。

「メル！ あたしの後ろに！」

「う、うん！」

メルとあたしは互いに駆け寄り合流する。

これでメルの方まで気にする必要が無くなる。

これで足手まといを気にしなくて済む。

これで邪魔者はいなくなる。

「シノちゃん。それ……」

「うるさいっ！」

あたしは知らずメルに怒鳴っていた。

「う、うん……」

ベータルタの炎の息吹（フレイム・ブレス）は封じた。

さあ、今度はこの刀の斬れ味を味あわせてあげるよ。

「ガァァルルルウ！」

ベータルタは翼を羽ばたかせて空中で停滞すると怒りの咆哮をあげた。

アルファアルファの亜種に位置する生物なら知能も高いはず。

「芸が無い。それでも魔獣なの？」

やっぱり地面から噛み付くくらいしかできやしないのか。

メルは既にその場から離脱している。

あたしは盛り上がる地面を蹴って真上に飛んだ。

「シノちゃん！」

デルタルタの巨大な口があたしの体に食らい付こうと地面から飛び出してきた。

それと同時に、もう一体のデルタルタが後ろから飛び出し、あたしの背後からかぶりつこうとする。

下と後ろから、デルタルタの巨大な口が迫る。

「アハハハハッ！」

——もう、なんなの？　こんなの、楽勝過ぎるよ。

あたしは刀を振るいながら体をひねり、後ろから飛び掛るデルタルタの顎に向かって水御華を振り下ろした。

そのまま下から食らいつくデルタルタの鼻先から尻尾へ刀を走らせる。

ドラゴンの中でもかなり堅い部類に入る岩竜の鱗。その魔種に当たるデルタルタも、あたしにしたらどうってことないや。

水御華で斬りつけた二体のデルタルタ。

その傷跡が大きく膨れ上がると、デルタルタの巨大な体は部分的に膨張を始めた。

いびつに膨れ上がるデルタルタの傷口。

それもすぐに限界を迎えようとしている。

そして——

ブチイイインッ！

二体のデルタルタは同時に巨大な体内から爆発し、辺りには大量の水と血とその肉片をばら撒いた。

斬りつけた体の中から水を爆発させる。あたしの新しい技だ。なぜこんなことができたのかよく分からないけど、考える暇も無くあたしは水御華を振るっていた。

ベータータルタの真下からもう一体。馬鹿の一つ覚えのようにデルタルタが口をあけて砂漠の海から飛び出してきた。

どう料理してやろうか。そんなことを考えるくらい余裕があ

った。

「じゃあこんなのはどうかかな？」

砂漠の地面に水御華を突き刺し、水を放つ。

「ハアアアアアア！」

水は飛沫を上げながら地面を走り抜け、飛び出したデルタルの真下に来ると三本の水柱を上げた。

水柱はデルタルの口先、顎、喉の三箇所食い込んだ。

やがて水柱は脳に辿り着き、そのまま頭皮を貫通するとデルタルの頭から勢いよく水と血を噴出した。

デルタルは勢いよく地面に転がると無様な顔で口をヒクヒクさせ、やがてその動きを止めた。

「あははっ。なんて顔だろう！」

リイイイイイイイイイイイン……

また水御華から音が聞こえる。

その音がだんだんと心地の良いものに聞こえてくる。

まるでもっとももっとと言っているかのようだ。

「大丈夫だよ。まだ一匹残ってるからさ」

あのベータルタがね。早く空から降りてきてくれないかな。刀が届かないよ。あいつは水じゃなくて刀で斬るって決めて

あるんだから。

仲間を失い、一頭だけになったベータルタを見ながらそんなことを考えていた。

「おい！ あんたを打ち落とすことなんて簡単にできるんだよ。こっちに降りてきなよ。魔獣なんですよ？ あたしを食べべてごらんよおい！」

ベータルタの凶悪な顔が怒りで更に強張っているのがわかる。ルルのようにあたしの言っていることは理解しているみたいだ。

水御華を鞘の沙華月に納めて腕を組むと、ベータルタに向かって余裕の笑みを見せ付けてやった。

「雑魚のクセに死ぬのが怖いのか？ 弱いクセにあたしに楯突くなんて馬鹿な魔獣だね！」

「ガアアアア！ グウルルルルッ！」
ベータルタが咆える。怒りを露に咆え猛る。

翼を羽ばたかせ、物凄い速さでこちらに突っ込んできた。その口を開けて、涎まみれの鋭い牙を光らせながら。

砂竜アルファルファの飛行は何度も見ているけど、あれに比べたら邪竜ベータルタの飛行速度は大したことはないな。

「ほら。食べられるもんなら食べてごらんよ！」

ベータルタは瞬間にあたしとの間合いを詰めると大きな口を更に大きく開けて食らい付いてきた。

あたしは避けられない。その場から一歩たりとも動くつもりはない。

「ギイイ、ガアアアアアアアア！」

咆えるベータルタ。

その咆哮がそのまま断末魔となった。

ベータルタがあたしの間合いに入った瞬間。その体は真つ二つとなっていた。

あたしが得意とする抜刀からの一撃。

勢いのまま左右の肉片があたしの横を通り過ぎ、それ以上の断末魔を聞くこともなく砂漠の地面を滑っていった。

あたしの両腕にはベータルタの血がびっしりとつけられていた。ねっとりとした感触が小気味よくあたしの手を濡らした。

「あーあ。やっぱりこんなもんか」

水御華を夜空に掲げ、水を出して腕についた血を洗い流した。こんなには水御華を自由に操れたのは初めてだった。それがす

ごく気分がいいや。

でも、もう敵がいらない。もっと敵がいればいいのに。そうしたらもつと刀振るうことができる。

水御華もそれを望んでいるはず。

リイイイン……

水御華から未だ微かに音が聞こえる。

やっぱり水御華もまだ斬り足りないのかな。

「シノちゃん……」

その声に振り返ると、怯えるような目であたしを見る女の子がいた。

「——シノ？ 君は？」

そっか。シノはあたしの名前だっけ。
でも：：この子の名前は思い出せないや。

「ウチはメルセレスね。忘れてしまったのね？」

「メル、セレス？」

忘れるもなにも。最初から知らない名前だよ。そんなの。

女の子は訴えるような目であたしを見た。

それがなぜか面白おかしくて、つい笑ってしまふ。

「ウチらは会ったばかりだけど、一緒に戦ったね！」

何を言っているんだろう。あたしは一人で戦っていたじゃないか。

「全部あたしと水御華が倒したんじゃないか。」

「シノちゃんは水を操る異能者だったのね。：：ダメね。砂漠

はそんなこと求めているくないね！」

「キミが言っていることよく分かんないや」

「シノちゃん！」

「いいじゃない。砂漠はあたしを求めているんでしょ？

そしてキミは砂漠の味方みたいだし。だったら——」

——キミはあたしの敵だね。

水御華を鞘に納めて柄に手をかけた。

「シノ、ちゃん：：？」

「大丈夫。この水御華はよく斬れるから痛みも感じないと思う

よ。今までで一番綺麗に斬ってあげるからね」

ニコツと女の子に笑いかけるも、女の子はそんなあたしを見て

怯えていた。それが可愛い。

女の子の方へ歩み寄りながら、ゆっくりと水御華を構え直し

た。その時——

「ルルルッ！」

腰のバッグから何か飛び出してきた。

砂竜アルファルの幼獣だ。

不器用にも翼をバタつかせてあたしの眼前に浮かんでいる。

「邪魔をするな！」

「ルウゝルルルル！」

「もう！ルルってば！」

あたしは咄嗟にそのアルファルの名を口にしていった。

「ル——ッ！ルル——ッ！」

バタバタと翼をバタつかせながら咆えるルル。
——そうだ。この子はルルじゃないか。なんで今まで忘れていたんだろう？

リン……

水御華からまた音が聞こえる。弱々しく、消えてしまいそうな音だった。

高揚していたあたしの気持ちが徐々に静まっていくのが分かる。

「あたし……あたしは？！」

今まであたしは何をしていたんだろう。

なぜルルは怒ってるんだろう。

メルはどうしてそんな顔をしているんだろう。

なんだかわけが分からない。思い出せない。

「ルルッ！」

気が付くとルルはあたしの視界から消えていた。

どこに行ったのかと首を振ると視界の右端にルルの黄土色の皮膚がチラリと見えた。その直後——

ごっちいいいいん！

あたしの後頭部に何かがぶつかった。

この痛みと鈍い音には覚えがある。

ルルの鉄球のような硬くて丸い尻尾があたしの後頭部に直撃したんだ。

それは今までで一番キツイ痛みだった。

かつてない威力に意識が簡単に奪われていくのが分かった。

▽△

顔にかかる眩しい光。

目を開けると朝日があたしの顔を照らしていた。

どうやら眠っていたらしい。

そう思うや否や。あたしの上にとさっと馬乗りになる人物が一人。それは間違いなくメルだった。

起き抜けのあたしはそれに抵抗する気力などない。

「おは、よう：：さん」

真剣な顔であたしを見つめるメル。

なんとも気まずい雰囲気である。

メルの顔が怒ってますよと言わんばかりだ。

知らないうちに寝ちゃっていたけど：：何かやっちゃったのかなあ？

「シノちゃん」

「はひ？」

低い声であたしの名前を呟くメル。

これは完全に怒らせてしまったらしい。

「シノちゃん。ウチの名前を言ってみてね」

「メルの？」

と、『メル』という愛称を口にするも、メルはまだじつとあたしの目を見て離さない。本名で言わないとダメなのかな？

「メルセレス」

今度はちゃんと名前で呼んだ。

それでもまだメルはあたしを見つめている。

だったらフルネームだ。

「メルセレスⅡシュトラーク」

「：：：：」

それでもまだじつとあたしを見つめている。

「——メルセレス様？」

「：：：様はいらないね」

沈黙に耐えられなかったあたしは思わず様付けをしてしまった。

だってあのメルが凄い顔であたしを見つめるんだもん。

ロメリアもそうだけど、メルは笑った顔がすごく自然なんだ。

そんなメルが怒ってるなんて、気にならないはずがない。

——ホントにあたし：：メルに何かしちやったのかなあ？

メルはやや怪訝そうな顔をした後、ハアと深くため息をついた。

「昨日のこと、覚えてないのね？」

「メルと会った時のこと？」

「その後ね！」

うーん。やっぱりメルの気に触ることでもしたようだ。

ただそれが何なのか、あたしに自覚がない。それがいけないんだと思う。

自覚がない、というか……邪竜ベータルタとの戦いから記憶がうやむやになっている。

水御華から水を出したことはなんとなく覚えているんだけど……どうやったんだろう？

「えーと、ひよっとしてメルが一人でベータルタをなんとかしてくれたの？ あたしは役立たずだったとか？」

ムツとした顔をするメル。どうやら違ったらしい。なんだか言えば言うほど失敗してしまう感じだ。

「ホントに覚えていないのね……？」

「ごめん。どうして寝ていたのかも分からないんだ。もしあたしがメルに何かしていたなら謝るよ。メル、あたしはキミに何をしてしまったの？」

「それは、ね……」

メルは口をつぐんでしまった。

それも悲しそうな辛そうな顔で、だ。相当ひどいことをしてしまったようだ。罪悪感に胸が痛くなる。

「ごめん、メル！ あ、あれ？」

メルを乗せたまま体を起こそうとしたら後頭部に痛みが走る。いきなりのことで驚いたあたしはそのままメルに抱きついてしまった。

「シノ、ちゃん……」

あたしはそのままメルを抱き締めた。

こうして抱き締めるとやはりまだ子どもなんだと分かる。そんな子に、そんな顔をさせたくない。そう思ってしまう。

「ごめんね。ホントに覚えていないんだ。あたしがメルにひどいことをしたのなら、ちゃんと謝るからさ」

「うん……」

「だから、言ってくれていいんだよ？」

「……ううん。大丈夫ね」

今度はメルの方からあたしを抱き締めてくれた。

その細い腕にギュッと力を込めて……。

「一人で怖かっただけね。シノちゃんが元に戻ってくれてよかったね」

「それって、あたしがいつの間にかやられてたってこと？」

後頭部にベータータルタのなんらかの攻撃が当たって、メルを残して気絶していたってことなのかな？

それにしてもこの痛み。ルルの尻尾でどつかれた時の痛みに似ているよーな？

「うん。そうね。だから目覚めてくれて良かったのね」

「そっか。心配かけちゃったね」

「うん。……あ。シノちゃんのちよんぼ、無くなってるね」

「ちよんぼ？」

メルの視線があたしの頭の上に向けられる。

普段頭の後ろで結んでいる髪のことを指しているのだろう。

頭の上に手をやると、確かにあたしのトレードマークが無くなっていた。

「おかしいな。ベータータルタの炎の息吹（フレイム・ブレス）を斬る時に紐が焦げたのかな？」

「それは覚えているのね？！」

「あれ？ でも他には思い出せないや」

ふと思いついて出してみたものの、自分でやった気がまったくしない。ホントにあたしがやったことなんだろうか。

炎を斬ろうだなんて、まるでイナさんのような思考だ。

あたしはポケットから予備の紐を取り出すといつもものように頭の後ろで髪を結んだ。

「短いのに何で結ぶね？」

「それはごもつとも。これはね、一種の願掛けなんだよ。あたしが尊敬している人のようになれますようにって」

なんて願掛けしてもうどれだけ時間が経っただろう。

あたしはまだ、そう成れないでいる。

イナさんのようになりたいんだ、あたしは……。

「その人はどんな人ね？」

「とっても強い人だよ。剣も心も。あたしもそうなれたらいいなってよく思うんだけどね。なかなか上手くいかないんだ」

現実には厳しい。この結んでいる髪にしてもそう。本当はもつと長かったのに戦いの最中に後ろからの攻撃を受けるため誤って自分で斬ってしまったんだ。

イナさんならきつと斬らないだろう。

今でもあんなに長く綺麗な髪をなびかせて戦っているんだから。あの長い髪を維持していることもその強さを表している。

「シノちゃんならきつとなれるね」

「先は長いと思うよ。イナさんだってあの――ああっ！ すっかり忘れてた！」

あたしは膝の上にメルが乗っていることも忘れて立ち上がった。

後ろへごろんと転がるメル。そのまま一回転すると再びその場に座り、あたしを見上げた。

「どうかしたのね？」

「イナさんが穴に落ちてそれっきりだったんだよ！」

「……イナさん、ね？」

あたしは急いであの大穴を探した。

夜だったのと、村の中を動き回っていたせいで正確な位置が分からない。

朝日に照らされた村は夜の時のような不気味さは無く、改めて村の全容を知った気分だった。

これでオアシスさえあればと思うくらい、村の建物はとても立派なものばかりだった。

しかし、肝心のイナさんが落ちた穴が見つからない。

「何を探してるね？」

「穴だよ。地面に大きな穴が空いているはずなんだ。メルと会った所の近くだと思うんだけど……」

「ああ。それならこっちだと思うね」

メルに案内されるとすぐに大穴のところまで辿り着いた。

穴はやはり大きく、中はとてつもなく深い。

これはとても下から登れるもんじやないぞ。

穴の中は思ったよりも砂で埋もれていなかった。爆発の時に吹き飛んだせいかもしれない。代わりに瓦礫が散乱している。

太陽の光に照らされてわかった。

この穴には二つの横穴がある。上から見るとそれが直線状に

位置しているため、元は繋がっていたものだと分かる。

地下道のようなものが地面の下を通っていたのだろう。

横穴は人工的に岩や土で固められていて、あたしが立って歩けるくらいに広さしかなさそうだった。

イナさんはこの横穴のどちらかを通っていったんだ。

きつともみくちゃんにされては分が悪いと、充分に戦える場所まで移動したんだと思う。

だからあの時『西じゃ！』と言ってイナさんが進む方角を教えにくれたんだ。

あれからどれだけ時間が経ったのだろう。イナさんが心配だ。

「ここは地下道ね。夜に襲ってきた暗殺ギルドの連中が拠点から拠点へ移動するのに使っていたものだと思うね」

「なるほど。あたしは地下道の上で戦っていたんだね」

敵の爆弾で地下道の天井を吹き飛ばしちゃったから脆くなつて穴があいたんだな。

「こういう村は拠点にし易いってじーちゃんが言ってたね！」

「へえ。メルのおじいさんって物知りだね」

「うん！　じーちゃんは反組織ギルドの、『アンリミテッド』の長だからね！」

メルの口から唐突にそんな言葉がこぼれる。

あたしは驚愕を隠せなかった。

「ええっ？　アンリミテッドって十五年前の戦争でインフィニットに滅ぼされたっていうあの組織のこと？」

インフィニットとアンリミテッドの戦争なら子どもでも知っている。それくらい有名な組織同士の大きな戦争だ。

「それはインフィニットが自分たちの力を広めるために作った偽りの情報ね。確かに十五年前に戦争をしてアンリミテッドは

インフィニットに負けたけど：：ウチらはまだ戦っているのね。

憎きインフィニットとね！」

インフィニットと敵対する組織は幾つもある。

けれど、アンリミテッドは当時その中で最大級の規模を誇っていた。

そのアンリミテッドが負けた事実がインフィニットの力を示し、多くの反組織の解体へ繋がったと聞いたことがある。

アンリミテッドがまだ生きているなんて。しかもメルのおじ

いさんがその長をやっているなんて思いもしなかった。

「おっと！ それよりも今はイナさんと合流することが先決だ。それでメル。これはどこに繋がっているのか分かる？ ひよつとして暗殺ギルドの本拠地まで繋がるとか？」

「それはないね。長すぎる地下道は危険ね。空気も薄くなるし砂漠の気まぐれで砂が集って重さで天井を崩すこともあるね。これはたぶん、身を隠しやすい岩場か何かのそばだと思うね。近くにオアイスもないしね。もしくは……」

「もしくは？」

「次に暗殺する人物のいる村か、その付近ね」

なるほど。こういうのを使うから昨晩のようなコンピを組むようなやつらが群れてやって来られるわけだ。

暗殺ギルドの人間が群れて砂漠をぞろぞろ歩いちや目立って仕方ないから。あらかじめ用意されたこういうルートを利用してしているんだな。

「さっそく入ってみるね？」

「えっ。ちょ、ちょっと怖いかも……」

「大丈夫ね。必ずどこかには通じているはずね」

「あたしが言ってるのは飛び降りる勇氣のことだよ」

ここから穴の底までそこそこ距離がある。

イナさんはうまく着地できたみたいだけど、下手に落ちればケガをしかねない高さだ。

「瓦礫のないところへ足から着地したら大丈夫ね。獣はどんな高いところから飛び降りても大丈夫だからね」

「あたしは獣じゃないし、獣にも限度つてもんが――」

ぐらり。

メルはあたしの腕を引っ張ると躊躇無く穴の中へ飛び込んだ。当然、腕を掴まれたあたしも穴の中へ……。

「うっきゃあああああ！」

「ひゃっふく！」

どしん！ としつかり着地するあたしとメル。

メルは余裕そうな顔をしているけど、これはかなり足の裏がジンジンくる。

「イタタ。もう、無茶するなあ」

しかし降りてみなければイナさんの足取りもつかめないんだ。

やっぱりこうするしかないか。

地下道は上から見たよりも少し広い。が、やはり刀を振るうには十分な幅ではなかった。

イナさんの身の丈ほどもある大剣、鬼神斬巖刀じゃあ特にそうだと思う。

「あれ？ 地下なのに明るいや」

地下道の中の床と壁の一部が青白い光を放っている。

淡い光だけど、足元や壁を確認するには十分な光だ。

「たぶん太陽石を使っているみたいね」

「太陽石？」

「そうね。長い年月を使って光を内側に取り込んだ石のことね。こうやって太陽石を並べることでも出入り口から入ってくる光を吸収しながら互いに光を放ちつつ、また吸収し合うね」

「じゃあ穴の付近は朝日を吸収したんだね。地下道の奥よりも明るく光って見えるよ」

太陽石に触ってみるも、手触りはごく普通の石だった。

それにしても砂漠の地下にこんな道があるなんて。砂漠の中を泳ぐ岩竜ガンマルマもビックリだ。

地下道への横穴は二つ。

右か左か、どっちへ行くべきかな？

「イナさんは西だって叫んでたっけ。ということは……？」

穴の中心で左右の横穴を交互に見比べる。

メルはそのうちの一つを指差した。

「西はこっちね。でも道が完全にまっすぐとは限らないね」

「分かれ道があったらどうしよう。それこそ進んでみなきや分らないことだけど」

「分かれ道はまず無いから平気ね」

不安なあたしをよそに歩き出すメル。ホントに慣れてるなあ。あたしは敵とバッタリ会ったりしないか不安だ。とても水御華を振れる広さじゃないから。

イナさんは大剣を超える大剣と小脇にロメリアを抱えていたんだ。地の利がないと感じ、進むことを選んでに違いない。

この地下道に敵が一人も倒れていないことがその証だ。

「イナさん大丈夫かなあ」

「その人、シノちゃんの言っていた剣も心も強い人ね？」

「うん。そうだよ」

「剣が強かったなら何で戦わないね？ 勝ってあの穴の下で助けを待たばいいね。逃げることないね」

ベゼルの時もそうだったけどメルは絶対に勝つことが前提になっっているなあ。

でもその前向きさが今は羨ましい。

あたしにはその自信が欠けているってイナさんにも言われているから。

「メルは体術があるから戦えるけど、ここじゃ剣は振れないよ」「どうしてね？ 天井も壁も腕を振るには支障がないね」

ブンブンと腕を振りながら話すメル。とことん体術思考だ。

ここで戦うことになったら地の利はメルが一番あるということも気づいていないのだろうなあ。

メルはただ勝つことを純粹に思い描いている。

根底から地の利なんて考えず、いつも通り戦えばメルはここで優勢なんだ。

余計なことを考え過ぎるのも、あたしの悪い癖なのかもしれないなあ。

あたしはメルに分かりやすく説明するために手を天井へかざした。

「剣は腕の先にあるでしょ。手は天井に触れなくても剣は触れてしまう。壁も同じだね。だからここで剣ができることは突きくらいなものなんだけど：：イナさんは自分と同じくらいの大さきの剣と、小脇に女の子を抱えてたんだよ。そんな状態じゃ戦えないよね」

「ふうん、なるほどね」

剣を振るうどころか。この横穴の中では剣を前後に持ち返ることまでできないはずだ。

進むと決めた以上、剣は穴の前に向けられているはず。

そうなるのと追ってくる敵を攻撃することはほぼ不可能に近い。ロメリアも抱えていることだし。

そういうえばロメリアを抱えたままであたしを背負って戦おうとしていたっけ。

無茶なことをしているかもしれないけど、イナさんならきっと大丈夫だって信じられる。

「その人凄いな。きっと筋肉モリモリね」

「うーん。確かに筋肉はあると思うけど……」

なにやら誤解してそうだけどイナさんに会いさえすれば分かることか。

とにかく、今は前に進むのみだ。

「シノちゃん気をつけるね。ここ、つるつる滑るね」

「え、そう？ うひゃあ！ す、滑った……」

「あははは。だから言ったね」

あたしたちはずんずんと地下道を歩いていく。

今の所、敵とは遭遇していない。

やはり昨晚の暗殺ギルドは襲ってきたメンバーがあれで総勢だったようだ。

先に進むほど床に敷き詰められた太陽石の輝きが弱くなっていく。

しかし、それも更に進むにつれて輝きが増し始めた。

出口は近いということかもしれない。

こんな所をよく夜中に使ったものだと思ってしまう。

「やっぱり、他に敵は出てこなかったね」

メルもあたしと同じことを考えていたようだ。

地下道へ降りてからまったく敵に遭遇していない。

先に通ったイナさんがここでは一人の敵も倒していないことにも繋がる。

あのイナさんがそうしなかったんだ。逃げに徹する時は徹するべきだということか。

「襲ってきた暗殺ギルドはあれで一つのチームみたいね」

「メルも気づいていたんだ。暗殺ギルドの人間は他の人間とチームと組んだりしないからね。チームで襲われたのはあれが初めてだったけど」

暗殺ギルドはほとんど一人での戦いを得意としているから。

昨晚のやつらは異例と言える。だからこれ以上の追撃は恐らくないだろう。

昨晚のは皆、同じ格好に同じ戦闘スタイルだった。

同じ環境で訓練したのは間違いない。チーム戦を得意とするからこそ、尚更他の人間とは組めないはずだ。

暗殺ギルドは各々の力量に絶対の自信を持つ者が組み込まれていると聞く。ギルドを組んでいるのも情報収集のためのみ。誰も自分が最強だと思う者たちばかりだ。

ベゼルはどうかだろうか。ギルドの寄り合いに顔を出してるイメージは全然湧かない。

ベゼルはあたし、シノIIカズヒ個人を狙っていた。

昨晚の暗殺ギルドの連中もあたし個人を狙ってきたのか。

反組織アンリミテッドのメルを狙っていたのか。

聞きそびれちゃったけど、その辺りもハッキリさせておかないと面倒なことになりそうだ。

「そういえば。メルは反組織の人間だってことがインフィニットや暗殺ギルドに知られてるのかな？」

「うん。ウチの顔は知ってる人間は知ってると思うね。仲間みんなは止めるけど、うちは前線に出て動いているからね」

暗殺集団に狙われているとは思えないくらいサラリと言ってしまふメル。それだけ自分の力に自信があるのだろう。

「それって危険なことだよな？」

「どうしてね？ 敵が向こうから出てきてくれて便利ね」
なるほど。そういう考え方もあるのか……いやいや、やっぱり危険だよ。

腕は立つとはいえこんな小さな子が一人で。

——つと、そういうえば。メルはなんであの村に居たんだろう。それも一人で……。

「ねえ、メルはどうして一人でいたの？ 反組織って少数精鋭なの？」

「シノちゃん。ひよっとしてアンリミテッドに入りたいね？」
振り返ると嬉しそうにあたしの手をとるメル。あたしは興味があつて聞いただけなんだけど……。

メルは仲間を探しているのかもしれない。同じ志を持つ反組織の人間と成り得る人物を。

確かにインフィニットのような巨大な組織を相手にするためには頭数は揃えないと厳しい。

しかし、あたしはアンリミテッドには入れそうにないや。

どうも組織という堅苦しい感じが肌に合いそうに無い。

「シノちゃんなら大歓迎ね！」

「ごめん。ちよつと聞いてみたかっただけなんだ」
インフィニットの異能者狩りによって、あたしは両親を殺されてはいる。

けれど、そういう戦争ごとを起こしたいとは思えないのだ。それにアンリミテッドのことをよく理解していないのもある。反組織が実権を握った時、世界や人々をどう導くのか。

もしかしたらインフィニットと何ら変わらない可能性もある。メルには悪いけど……。

「それで、メルはどうしてあそこにいたの？」

「ダンベルギアの近くを通った時に火の手が上がっていたのね。仲間と行動していたけど、ウチが偵察を任されたね。そろそろ固まっていたら偵察にならないからね」

「あつ。メルもダンベルギアにいたんだ？」

ということはメルもあたしたちと同じくらいの時間にダンベルギアを出たことになるのかな？

廃村に立ち寄ったことも偶然同じで……。

「ウチが到着した時には雨が降り出していたね。空は青空のままだったのに、ダンベルギア周辺にだけ恵みの雨で潤っていたね。そんなことができるのは異能者だけね」

ここであたしの手を放すと、メルはじつとあたしの目を見た。どうやらバレているらしい。

その雨はあたしが降らせたということ。

そりゃあ目の前で刀から水を出したら当然か。

メルは神妙な顔であたしを見つめていた。

「シノちゃん。……ダメね。砂漠はそんなこと求めていないね」
砂漠の声を聞いたのだろうか。メルは悲しそうにあたしを見ていた。

あたしはメルにとって、砂漠にとって、してはいけないことをしてみたみたいだ。

話の流れから、それは水御華から水を出すという行為を指しているのだろうか。

「それって……貴重な水を無駄にしているから？ たった一滴の水ですら人を狂わせてしまうから？」

砂漠だけのこの世界にとって水はお金と同等の価値がある。過去に水御華を狙って襲われたこともあった。

野盗などではなく、ただの村人があたしに牙を剥いた。そういう世界なんだ。

しかしメルはあたしの言葉にふるふると首を振った。

「違うね。この世界に砂漠のアメフラシは必要ないね！」

あたしの通り名『砂漠のアメフラシ』がメルの口から出た。ひよっとしたら、あたしを狙っているのはインフィニットだ。けではないのかもしれない。

反組織アンリミテッドの目的もなんとなく見えてきた気がする。

「世界は終焉を迎えようとしているね。砂漠がそれを求めているのね。ウチは何度もその声を聞いたね！」

メルの声が地下道に木霊する。

その顔には焦りが色濃く見えていた。

「それがアンリミテッドの意志なの？ 世界は終焉に向かっていると考えているの？」

「そうね。何者の支配も受けず、世界の終焉と共に人間はこの地より消えなければならぬね！」

人類を救済するという名目を掲げるインフィニット。

アンリミテッドとはその正反対ということになる。

そういう名目よりもインフィニットのやり方に異を唱えるための反組織だとは思うけど。

メルはあたしが水御華を使って水を操っている光景をどんな風に見ていたんだろう。

それでもメルは笑顔を向けてくれた。

その裏にそんな想いがあるとは知らないで、あたしは……。
「シノちゃん。アンリミテッドに入るね！ 組織が管理してい

るなら命を狙われることはないね！」

「うーん。でもねえ……」

「それができないというなら……ウチがね！」

メルの手が突如あたしの首に伸びる。

絞めるというより掴むという感じか。呼吸を止めるよりも先に首の骨を折ると警告されているみたいだった。

真剣なメルの目が薄暗い地下道の中でもはっきりと見えた。

それは組織の人間としての顔。アンリミテッドのメルセレスとしてあたしの前にいるんだ。

「メル：：ごめんね」

「シノちゃん！ どうして：：どうしてね！」

それでも：：あたしはあたし。あたしだからだ。

アンリミテッドやメルの意志があたしと違っているというのなら。やはり相容れない。あたしは変わることはできない。

世界が終焉に向かっていているなんて、やっぱり思えないんだ。

それは能天気でもいつもテキトーなあたしの頭でも変わらないこと。

世界やオアシス、人間やアルファルファたちは生きたいと思っ
ているはず。あたしはそう信じたいんだ。

そうでなきや、この世界はあまりにも悲しすぎるから。

「砂漠以外の声も、聞けたらよかったのに、ね」

「ウチは好きで砂漠の声を聞いているんじゃないね！」

あたしの首を掴むメルの手に力がこもる。

「うっ。わ、かっ——て、る、よ：：」

それでも、あたしが顔を歪めると自然と手を緩めてくれた。

こんなこと、メルにさせちゃダメなんだ。

アンリミテッドの人間だとしても、メルはメルなんだから。

「あたしは、世界は生きたいと思ってるんだ。人も、動物も」

「でも砂漠は違うね！」

「うん、砂漠はそうじゃないかもしれないけれど。砂漠の意見
が今は一番多いけど、生きることまで多数決で決めちゃダメだ
と思うんだ。力のある者の意見に従わせる。それってインフイ
ニットと変わらないじゃない？」

「あ——」

「分からないよ。人間やアルファルファ。砂漠やオアシス。水
に草木に空気。そのすべてがどう思ってるかなんて、あたしに
は分からない。：：でも、あたしは生きたいって思ってるよ。
殺された両親の分も生きていなくなっちゃ、てね」

そう言って笑ってみせると、メルの手はあたしの首から離れ
た。

真剣だったメルの目。それが不安や怯えのようなものになっ
ていく。そこにいるのはアンリミテッドのメルセレスではな
くなっていた。

あたしの知る、メルそのものだ。

「メルは砂漠の声に怯えていたんだね」

あたしの言葉にビクツと体を震わせるメル。やっぱりそうだったんだ。

望んで異能者に生まれたわけでもないのに。

砂漠の声を聞きたくて聞いているわけじゃないのに。

砂漠はメルに言うのだろう『滅べ、人間よ滅べ』と……。

今でこそメルは異能の力と上手く付き合えているけれど、幼かった頃はそんな力の制御もできなかつたに違いない。

呪いに近いその言葉を、メルはずっと聞き続けていたんだ。

普通の人ならきつと耐えられなかつただろう。自ら命を絶つてもおかしくない。

それに耐えられたのは、きつと周りにいい人たちがいっぱいいたからなんだと思う。

だからメルはこんなにもいい子でいられるんだ。

「つらかったね」

「ううん。ウチにはじいちゃんやたくさん仲間がいたね」

「うん。そうだね」

メルにはたくさんの方が支えになってくれたのだろう。

あたしの周りにはそんな人たちがいなかったけど……今はイナさんやロメリアがいる。それが今のあたしの支えとなっている。

だからメルの気持ちはよく分かるんだ。

「シノちゃん……」

メルはあたしの胸に顔を押し当てると、あたしの服をキュツと掴んだ。

その頭をあたしも抱き寄せた。

「じいちゃんと言っていたね。異能者はその力に心を奪われてしまうこともあるってね。自らを滅ぼすってね。ウチは絶対にそうならないって決めたね」

「うん。メルならきつと大丈夫だよ」

「シノちゃんもそうなって欲しくないね」

「大丈夫。あたしには水御華がついているんだから」

「……」

それにあたしの異能の力はただ水御華を使って水を操る程度のものだ。

そんななんでもない力に心を奪われることはないはずだ。

あたしはただ、水御華を信じて刀を振るうだけだ。

「あれ？」

腰のバッグからルルがもぞもぞと動きだした。

ルルだ。さつきまで大人しかったのに。

「ルウ？」

バッグを開けてルルを手のひらに乗せると、ルルは眠たそうに目をパチクリと瞬かせていた。

アルファアルファは他の動物と違って夜行性じゃない。人間と同じで日中に活動する。

それでもルルはかなりのお寝坊さんだ。起きている時よりも寝ている時が多い。

それに今はまだ早朝だからかなり眠たいはずだ。

「あ。昨日の砂竜ね」

「砂竜アルファアルファの幼獣、ルルって言うんだよ」

ルルはあたしの手のひらでコテンツと体を倒すと再び目を閉じた。完全に寝ぼけているのが分かる。

あたしの手のひらがあつたかいからだろうか。

カワイイ顔で寝ちゃってまあ。コリコリしてやろうかな？

「アルファアルファが人に懐いているの、初めて見たね」

「ルルは珍しいのかもね」

アルファアルファは人間を敵視しないけど、特別協力的というわけでもない。

人間もアルファアルファも、互いに干渉しないのが一番の生き方らしい。

「珍しいのはシノちゃんね。水を出して砂漠を驚かせたり、ウチが首を絞めても笑ってみせたり。それにこの子もこんなに心を開いているね」

メルは慎重にルルの体に触れると優しく撫でた。

それくらいじゃこの寝坊助は起きない。

「ここをコリコリすると喜ぶよ」

あたしは眠っているルルの眉間をコリコリする。

ルルは閉じたままのまぶたをピクピクさせ、喉を動かした。

「ここね？」

「うん。そこそこ」

メルも同じくルルの眉間をコリコリ。

ルルはそんなに気持ちがいいのかな。眠ったまま喉を鳴らして喜んでいる。

「本当に、不思議ね……」

「ルルが？」

「シノちゃんがね」

「あはは。あんまり褒められたことじゃないね」

「そんなことないね。ウチはそんなシノちゃんが好きね。だからどの組織に狙われたりして欲しくないね」

「心配してくれてありがとう。でもねメル。砂漠のアメフラシはただの人間だよ。一人じゃなんにもできない。ただの人間なんだよ……」

水を操ることができても、町や村に雨を降らすことができない、それはほんの一時のことではない。

この砂漠の世界で、本当の救いになんてなれないんだ。あたしは何度も目の前で救えなかった命を見てきた。

だからかな。雨を降らしたいと思ってしまうんだ。少しでもこの世界に潤いが欲しいと思ってしまうから……。

それは全部自分のための行為でしかないのかもしれない。……そう。砂漠のアメフラシはそんな人間だ。

他のみんなと変わらないちっぽけな生き物なんだ。

「砂漠のアメフラシは、ただの人間……ね？」

メルはじつと何かを考え始めた。

あたしに視線を移すものの、目が合えばまた視線を外して考え込んでしまう。

考えているのかなあ。あたしをどうするか、どうもしないのかを。

しかし、結局メルは答えを出さなかった。

「シノちゃん。先を急ぐね」

「うん。そうしようか」

再び地下道を歩き出すあたしたち。

培ってきた考えはそう簡単に変えられるものじゃない。

だからあたしもメルの組織に入ることを拒んだんだ。

どうすることがあたしにとっていいことなのか。今は分からないけど、今はこれでいいんだと思う。

イナさんだったら……きつとそうするはず。信じる理由はそ

れだけで充分だ。

地下道を進み続けると程なく出口に出た。

巨大なサボテンの密集地帯。

その中心にこの地下道への入り口が隠されていたようだ。

これは誰も気が付かないだろうと思ってしまっただ。

外に出ると少し離れたところにオアシスと、それに群がるよ

うにテントが張られているのが見える。

イナさんを追っていた暗殺ギルドのやつらがどこかに倒れて

いると思っていたけど、どこにも見当たらなかった。

イナさんのことだから地下道を出たらすぐに戦闘に入ったと

思うんだけど……。

ここにはイナさんの姿もロメリアの姿もない。

とりあえず、あのテントの集落へ行くべきかな？

「大変ね……」

「メル？」

「地下道はここに通じていた……暗殺ギルドは、インフィニッ

トは、アンリミテッドの居場所を突き止めていたのね！」

「ここがアンリミテッドの拠点だったの？！」

「あっ！」

いきなり走り出すメル。あたしもその後を追った。

メルが見つけたのは砂漠に付いた足あと。

一人や二人の足あとなんて砂と風で簡単に消されてしまうも

のだけど、これはそれ以上の規模。何十人という人間が歩いた

跡だ。

その痕跡はオアシスから伸びて西の方角へ続いていた。

「そん、な……」

がくりとその場に座り込むメル。

何のことも分からないあたしは、その横にしゃがんでメルの

顔を覗いた。

「メル？ 何があったの？」

「この方角には……ね。インフィニットの西の城砦、ウエスト

サンド宮殿があるね」

インフィニットは東西南北、そして中央にその拠点を置いて

いる。その権力を余すことなく広げるためだ。

その中でも西のウエストサンド宮殿は中央に並ぶほど多くの兵を持つていると聞いたことがある。

改めてアンリミテッドの集落を見ると、たくさんのテントは普通に並んでいた。

壊されたり焼かれた跡がないところを見ると、インフィニットに襲われたわけではなさそうだ。

つまりこの足あとはインフィニット側のもではなく、メルと言うようにアンリミテッドの大群がインフィニットに向かって進軍したものなんだとわかる。

メルはそのことに落胆しているのだろう。

またインフィニットと反組織の戦争が始まるのだろうか。

「おかしいと思ったね。ウチ一人でダンベルギアの様子を見に行けなんて……。ここに戻ったらインフィニットと戦争すると、みんな知っていたね」

メルは置いてきぼりをくらったんだ。まだ若いし、アンリミテッドを束ねる長の孫でもあるからか。

あの集落の規模からアンリミテッドの人数はおよそ五百人ほどだろう。そのうち戦える者となるとまた限られてくるはず。

その人数でウエストサンド宮殿を落とせるとはとても思えない。強力な異能者がたくさんいる……。なんて都合のいいことがあるればまた話は変わってくるんだろうけど。

「シノちゃん！」

メルはあたしの手を掴むとアンリミテッドの集落へ駆け出した。あたしも釣られて駆け出してしまおう。

「どうしたのさ。メル？」

「確認することがあるね！ シノちゃんにも来てもらおうね！」

「うん。わかった」

アンリミテッドの人間に、あたしが砂漠のアメフラシだと知れても殺されることはないだろう。

イナさんやロメリアのことも気になるし……。何よりもメルだ。メルは走りながら泣いていた。

その涙の雫があたしの方へ飛んでくる。

掛ける言葉は見つからないけど、放ってはおけない。

メルと繋いだ手をぎゅっと握り、あたしも走り続けた。

「ん？ あれは……。？」

ザクザク砂漠を蹴る音に集落の人たちが集り始めた。

そのほとんどが老人や女の人。その手には武器や鈍器が握られていた。残された人たちもピリピリしているんだ。

そんな中、メルが存在に気づいた人もいた。

「メルお嬢だ！ お嬢が帰ってきたぞ！」

「メルちゃんと、……誰ぞね？」

「お嬢だ！ とにかくみんな今だ！」

集落の人たちはメルを快く迎えるかと思いきや、まったく別の行動に出ていた。

手にした武器も捨てず、体を強張らせてこちらを迎え撃とうとでもしているかのようだった。

「もしかして操られてる？！」

構わず走り続けるメルとそれに付いていくあたし。

すると、集落の手前で集落の人たちは一斉に縄のようなものを引っ張り出した。

その縄は砂漠の中を通って、あたしたちの足元まで繋がっていった。

「掛らないね！」

慣れたように飛び上がるメル。

……が、あたしはこんなものに慣れていないはずがない。

「シノちゃん！」

「いやいや。無理だつてば！」

飛び上がるメルと置いていかれるあたし。

手を繋いでいる以上、メルも逃げることはできない。

足元から地面が崩れる。

あたしとメルはそのまま落とす穴の中へ落ちていった。

今日はやたら落ちる日だ。

『せーのっ！ せっ！』

更に落とす穴の上から網をかぶせられるあたしとメル。

メルはこの人たちに何をしたんだろうか。

「やったぞ！ メルお嬢を捕獲したぞ！」

うおー！ と喜びの声をあげながらわらわらと穴に群がる集落の人たち。

これがアンリミテッドのやり方なんだろうか。いったいメルはどういう風に育てられたんだろう。

「シノちゃんのせいね」

ぶすーと頬を膨らませるメル。

そんなの分かるわけないよおく。

観念して上を見上げると、誰かがこちらを覗き込んでいた。

「ホッホオウ。まだまだネ、メル」

「じーちゃん！」

白い髪と髭でいっぱいなおじいさんが愉快そうにこちらを見下ろしていた。

あれがメルのおじいさん。アンリミテッドの長なのだろうか。反組織の長にしてはかなり小柄な体つきだ。

おじいさんの視線がメルからあたしに移される。

その柔らかな笑顔はやはりメルのおじいさんだと分かる。

「あんたがシノ⇨カズヒだネ？」

「あつ。はい！」

思わず返事をしちゃったけど……あたし、まだ名乗ってないよね？メルもシノちゃんとしか言ってなかったし。

おじいさんは顎に手を当ててあたしをジロジロ眺めた後、深いため息を吐いた。

「ハア〜ムウ〜。幻滅ネ。もっとセクシイダイナマイツボディを期待していたわしの夢を返せネ」

「うわぁ！ほっとけえ〜！」

何で初対面でそんなこと言われなきゃならないのさ？！
見ず知らずのおじいさんにそんなことで幻滅される云われは

無いよ！！

別に気にしちやいないけどさあ。……うん。

「じーちゃん！シノちゃんをいじめないでよね！」

「すまないネ。冗談だネ。充分べっぴんさんだネ！」

ガツクリするあたしに慌てて言い繕うおじいさん。

そういう所は憎めないけどさあ……。

「べっぴんさん過ぎてスタイルも期待しただけだネ」
ムカムカツ！

前言撤回。まったくフオローになつてないじゃないか！

「じーちゃんは女の子が大好きなのね」

「メル……。言わなくても分かるから……」

こんなおじいさんに育てられたのにメルがこんないい子でホ

ントに良かったと思っってしまった。

それにしてもあたしたち、いつまでこの落とし穴にいなきやならないんだろう。

「先にやって来たイナ殿がそれはそれは美人でスタイルも良かったからネ。あんたのことを期待しても仕方ないネ」

「変な期待しないでよ。――って、やっぱりイナさんはここに来たんだ？」

まさかイナさんの名前が出てくるとは思わなかった。

やっぱりここであたしを待っていてくれたんだ。

「イナさんはどこに？ 今どうしているの？」

「イナ殿は大きな剣と捕縛した暗殺ギルドの男を二人も引きずってやってきたネ。ロメリアも一緒だネ」

「ロメリアも！ よかったあ」

「あの娘はすごいネ。何がすごいって、ここに來てから五回も名乗りをあげたネ。五回もネ。イナ||シルバチオ||ボルダーンと大きな声でネ。もう耳にタコだネ」

さすがはイナさん。ところ構わず名乗っているんだ。相変わらずだなあ。

おかげでイナさん以外の何者でもないと思っってしまった。

「その腕前も目を見張るものがあるネ。暗殺ギルドを倒したことでだけじゃないネ。わしが触ろうとするにあのバカでかい剣がいつも飛んでくるネ。結局触れなかったネ……」

「じーちゃんが触れないなんてすごいね！」

「あのう、盛り上がっていると悪いんだけど。そういう話は後にももらえないかなあ……」

あのイナさんならおじいさんの痴漢になんか合わないと思えるけど、それより今はどうしているかの方が気にかかる。

「そうネ。積もる話は後ネ。ロメリアもいるからわしの部屋に來るといいネ」

「ロメリアもいるんだ。よかったあ」

あたしとメルは落とし穴から引き上げられると、四人がかりで両腕を捕まえられる。

「え？ ちよつと？！」

「……ちよつともよくないね……」

両手を後ろで縛られ、首に縄も掛けられてしまった。

メルも同様だ。

「仕方ないね。捕まったのが悪いね」

メルはがっくりとうな垂れて歩き出した。

これはメルにとつて日常的なことなんだろうか？

「これじゃあ罪人だよ」

あたしの言葉にメルのおじいさんは満面の笑みを浮かべた。

「そうネ。砂漠のアメフラシは砂漠にとつて罪人に等しいネ」

「あ：：」

砂漠のアメフラシという通り名まで知られていたか。

アンリミテッドは砂漠のアメフラシを敵視しているから、も

はや言い逃れはできない。

このおじいさんはきっと異能者だろう。

何らかの能力を使ってあたしの正体を暴いたんだ。

これはイナさんやロメリアの心配ばかりしていられなくなってきたぞ。

あたしの命すらも危ういじゃないか！

集落の中央には一際大きなテントが張られていた。

その周りには武器や防具が並べられていて、他にもたくさん
の武器が立て掛けられていたであろう痕跡が残されている。

多くのアンリミテッドの戦士がここにあつた武器を手にして
ウエストサンドへ向かつたんだと分かる。

そのことから、ここがアンリミテッドの本拠地なのだと確
信できる。

その広いテントの中に連れてこられると、中にいた大勢の人
たちは席を外し、おじいさんと三人だけにされてしまった。

そこにロメリアの姿は無い。

これから何が起こるんだろう。まさか殺されたりはしないと
思うけど：：。

おじいさんはどっかりとイスに座ると、白髭だらけの顎を両
手に乗せて両肘を両膝につけた。

さつきとは打って変わって真剣な眼差しであたしを見つめる。

「シノ||カズヒ。砂漠のアメフラシ。水を操る異能者。砂竜ア
ルフアルファの幼獣ルルを従え旅をしている：：」

「ルルは従えてるんじゃないよ」

「ふむ。お友達というところかネ。成り行きでネ」

今度は何ルのことまで。

このおじいさんはあたしの心を見透かしているのだろうか。でも、今のあたしはルルのごことは考えていなかった。

異能の力を持つというのなら、このおじいさんは何をしてい
るのだろうか？

目に見えるような力じゃないから尚更わからない。

異能者は当たり前のようにその力を使っているから、他人か
ら見れば不思議なものなんだ。

「わしはメルセレスのじーちゃんのだイムレラグⅡシュトラ
セという者だネ。メルから聞いていますネ？」

「アンリミテッドの長をしているってことは知ってるよ」

「ホオッホオウ。それはハズレだネ」

おじいさんの言葉にどういふことかとメルを見ると、メルは
目を見開いて驚愕しているようだった。

「まさか……とーちゃんが長になったね？！　じーちゃんは生
きてるうちは長をやるって言うていたね！　今はまだ戦う時じ
やないって、言うていたね！」

アンリミテッドの長はメルのおとうさんになったのか。

こういうことは血族が引き継ぐものなんだろうか。

インフィニットの権力者がそうであるように……。

「お前は気が早いネ。わしはお前の父、カルールにアンリミテ
ッドの長を託した覚えはないネ」

「いったいどういうことね？」

「カルールは何かきっかけが欲しかったようネ。なんでもいい
から今すぐにもインフィニットへ攻め入りたいと思っていた
ネ。それはずっと前からわしも感じていた……そこへイナ殿が
やってきたネ」

「まさかイナさんがこの戦争を？！」

あたしの言葉におじいさんは首を振った。

ああ、良かった。いくら相手がインフィニットだからって、
イナさんが自ら戦争を率先することはないはずだ。

絶対しないって言い切れないから不安でもあるけど……もし
行動を起こすとしたら必ず一人で行うはず。

その正義の前に、イナさんはまっすぐだから。そうと決めた

ら何をするかあたしにも分からない。

でもイナさんがしようとしていることは正しい。それはいつも感じていることだし、あたしも信じられることだ。

「どういうことね？ その人と、どう関係しているのね？」

「ふむ。カルールはイナ殿が暗殺ギルドの者と戦うところを見ただろうネ。『イナ殿はアンリミテッドに勝利をもたらしてくれる救世主だ！』などと仲間を煽り立てたネ。インフィニットへの敵対心、それがこんなに大きく広まっていたとはわしも思わなかったネ。その言葉に一人、また一人と立ち上がったネ」

イナさんは見た目の美しさもあり、その剣技を持って舞うかの如く戦う姿にも華がある。

味方につけばどれだけ心強いかな。それはあたしが一番よく分かっている。

「でも、じーちゃんと同じ気持ちの人もいたね。まだ戦う時ではないと、次に負けたらそれですべてが終わると分かっていたはずね！」

「無駄ネ。およそ半分の人間がカルールに賛同したネ。戦力の半分で戦えば敗北は必至ネ。だから残りの者も手を貸すしかないネ。アンリミテッドが立ち上がれば近隣の反組織も同じ理由で立ち上がるネ。アンリミテッドの敗北はそのままインフィニットによる人類の征服を意味しているからネ」

既に解体させられたと言われていた反組織アンリミテッドの影響力がこんなに強いとは思わなかった。

この人たちがいなかったら、今頃はもっとインフィニットが力を付けて異能者たちを追い詰めていったかもしれない。

戦争に敗れても尚、戦い続けてきたアンリミテッドの人たち。そんな人たちだからこそ、イナさんも手を貸そうと思ったに違いない。

「イナさんは一緒にウエストサンドへ向かったんですね？」

「そうネ。囚われている異能者が大勢いると知って『見過ごすわけにはいかぬ！』と言っていたネ。その言葉は力強過ぎたネ」

そっか：自由を奪われた人たちの解放。イナさんはそのため

に剣を振るうことを選んだんだ。

やっぱりイナさんだと思ってしまう。その姿に胸を打たれたアンリミテッドの戦士もきつといるに違いない。

結果的にイナさんの発言も戦争の引き金になってしまった。けれど、アンリミテッドにとってイナさんの参加は値千金。

これ以上の戦力はないとあたしは考えている。

それでも、イナさんを加えたところであのインフィニットの拠点の一つを落とすことは難しいだろう。

また多くの血が流れようとしているんだ。この世界は。

争い、奪い続けるだけの世界。これじゃあメルの言ったように人間は滅ぶべきだって考えちゃうよ。

そんなことないって、あたしは信じたいのに……。

「イナ殿から伝言があるネ」

「えっ。イナさんから？」

「そうネ。『先に行っている』だそうネ」

先に行っているといことは後から来いということか。

あたしが後を追うと確信しているからか。

それともアンリミテッドに手を貸してインフィニットと戦えと言っているのだろうか。

インフィニットの独裁を止めるにはアンリミテッドのような反組織は必要だ。

たくさんの異能者が囚われているのならそれを助けてあげたい。それがロメリアの目を治すきっかけにも繋がるはずだから。

それでもあたしはアンリミテッドと共に行動することを迷うだろう。

いつもそうだ。あたしは迷ってばかりだから。

それもイナさんが先に行くことで迷いがなくなる。

だから『先に行っている』と言葉を残したのかもしれない。考え過ぎだろうか――いや、あの人のことだ。きっとそうに

違いない。

イナさんはこうやって何気なくあたしの進むべき道を示してくれるんだ。多少強引なところもあるけどね。

だったら……行くしかない！

「シノちゃん？」

不安げな面持ちであたしを見るメル。

やはりメルはまだこの戦争を反対しているのだろう。だけど、もはやこの戦争を止める術はない。

「あたしは行くよ。先で待ってる人がいるからね」

「シノちゃんまで……」

「メルの気持ちも分かるけど。動き出してしまったのならもう後戻りはできないよ。戦う時は今なんだ」

「戦う、時ね……」

メルはまだ迷っているようだった。

この戦いはもう止められない。

認めたくないという気持ちがあるんだろう。

メルの気持ちも分かるけど、こうなってはやはり後戻りはできない。

「……今、戦えるとも限らないネ」

「えっ？」

おじいさんは即座にあたしに詰め寄るとその手刀をあたしの喉元へ向けた。

それは一瞬の出来事。

自然過ぎる予備動作に、あたしは一切の警戒ができなかった。未だ縛られて動けない今、成す術がない。

「熱っ！」

触れられていないはずの喉に熱を感じた。

「じーちゃん！ やめるね！」

「砂漠のアメフラシは砂漠にとつて害悪ネ。それだけじゃないネ。水を操る異能者が、インフィニットの手に渡ることがあればそれこそ一大事ネ。それがなぜ分からないネ」

「でも、シノちゃんは……」

あたしは緊張感というものが欠けていた。

ここはアンリミテッドの本拠地。目の前にいるのはその長だった人なんだ。

縛られてはどうすることもできない。あたしの命はこの人が握っているんだ。

「アンリミテッドを束ねていた者として、このまま行かせる事はできないネ。このまま喉を切り裂いてやっても――」

「シノお姉ちゃん！」

緊迫した状況の中、テントに入ってきたのはロメリアだった。「ぬあゝ？ どうしてロメリアがここにいるネ？」

ここにあたしがいると声で分かったのか。

ロメリアは駆け寄るとおじいさんを押し退けてあたしに飛びついてきた。

「ロメリア！」

「良かったあ。やっぱりシノお姉ちゃんだあ」

この子はこんな状況だっていうのに。どうしてこんなに安らぎを与えてくれるのだろう。

ここにロメリアが入ってきたことで殺伐とした空気が一気に引いていくのが分かる。

ロメリアが無事だと分かり、あたしも安心してしまった。

「いいところだったのにネ」

おじいさんもやれやれと元の場所に座ると、また頬杖をついていた。

戦意を削がれ、やる気のない顔であたしたちを見ていた。

「シノお姉ちゃん。イナお姉ちゃんが行っちゃったよ？」

「うん。話は聞いてるよ。あたしも行かなくちゃならないんだ」

「そうなんだ。でも二人なら大丈夫だもんね！」

ロメリアは本当にそう思っているのだろう。その裏表のない笑顔がその証だ。

二人なら大丈夫、か。確かにイナさんとなると心強い。二人というよりイナさんだからという方が正確かもしれない。

あたしの戦力なんてイナさんに比べたらたかが知れているんだから。

「アンリミテッドの長として行かせるわけにはいかないネ」

おじいさんは本当にそう思っているのだろうか。

かなり気の抜けた顔でそう言った。

「だったらウチがシノちゃんを連れて行くね」

メルはふるふると体を揺さぶり、体に縛られた縄をあっさり解いてしまった。

「やれやれネ。メル。あやつらが何のためにお前を置いて出発したか分からないネ」

「反対なら腕づくで止めたらいいね。ウチよりじーちゃんの方が強いね」

「ホオッホウ。言いおるネ」

メルはおじいさんを警戒しながらあたしの縄も解いてくれた。

まだあたしのやり方に疑問を持ちながらも、あたしのことを考えてくれているんだ。

そこからメルからの信頼が感じられる。それが嬉しい。

「ありがとう、メル」

「いいね。一人でも多いほうがいいからね」

メルはそう言うとおじいさんの方を見た。メルの思惑とは裏腹に、おじいさんは終始何もしてこなかった。

メルの言うことが本当なら、おじいさんはあたしたちを止めることができたはず。それなのにそうしなかったのだ。

おじいさんがどう考えているかは分からないけど、メルを信じていることだけはよく分かる。

もしかしたら、止める気なんて最初から無かったのかもしれない。

「シノちゃん。行くね」

「うん。ロメリアはここで待っててね？」

「ルルは？」

ロメリアに言われて思い出した。

バッグの中を開けるとルルが勢いよく飛び出してきた。

「ルルルルウー！」

あたしの肩に飛び乗るとくるりと反転。

そして当然のようにロメリアの肩に乗った。

「ルルもロメリアと待ってるって」

「ルーッ！」

「わあい。ルルと待ってるー！」

「ルウ」

ルルはロメリアの頭の上に乗るとあたしの方を見て一鳴きする。

ロメリアを連れて行くわけにはいかないけど、一人で置いていくのもちよつと不安だった。

ルルはそんなあたしの気持ちに伝えてくれたのかもしれない。

「ありがとう、ルル」

「ルルルウ」

「いってらっしゃい。お姉ちゃんたち」

軽く手を挙げてここを後にしようとするあたしとメル。

それを阻んだのはおじいさんだった。

「待つネ。命を懸けることになるネ。分かっているのネ？」
メルは振り返ると真剣な眼でおじいさんの方を見た。

「もちろんね。これまでもそうしてきたね。それはこれからもきつと変わらないね」

「ふっ。頑固な所はお前の母親にそっくりネ」

おじいさんはメルのところへ歩みだすと懐から何かを取り出し、メルに差し出した。

民芸品だろうか。丸い形をしたその中心には紋章のようなものが象っている。

「アンリミテッドをまとめられなかったわしはもう長である資格はないネ。次の長としてメルセレスⅡシュトラーセ、お前を長に任命するネ」

「ウチが？ どうしてウチなのね？」

「お前の父、カルールを長にしてはこの戦争のすべてを肯定することになるネ。勝ちを信じて盲進してはおるが、他の者から見たら負け戦ネ。それは死んでも守りたいものがあるという証に見えるかもしれないが……、わしはそんなものは愚かだと思っっているネ」

「争いの世界を終わらせたいと願う者が、争いを生み出してはいけないね。それに死んだら守りたい者も守れない。じーちゃんがよく言っていたことね」

争い、奪い合う世界。アンリミテッドもそんな世界を変えたかったんだ。

人類の終焉を迎えることのみあたしの考えと反しているけど。ものの考え方はインフィニットよりもしかっかりしているみたい。滅ぶ時は滅ぶものだとするならば、異能者というだけで命を奪うインフィニットに比べたらアンリミテッドのほうがよっぽど人々を救済している。

「六代目アンリミテッドの長が任命するネ。メルセレスⅡシュトラーセ。七代目アンリミテッドの長として、組織を導いていくネ。砂漠の神と共に……」

メルはおじいさんの手を取ると、その手をおじいさんの方へグツと押し込んだ。

「わかったね。ウチはアンリミテッドの長になるね。でも、それは戻ってきたらのお話ね。今のウチは砂漠の戦士メルセレスだ

「からね」

「よかるう。見事生きて帰り、アンリミテッドの長になるがいネ。砂漠の加護があらんことを……」

「うんっ！ 行ってくるね！」

メルは力強く頷くと無邪気に笑った。

やっぱり血の繋がった家族だと感じさせられる。

信頼しあっているその様は、微笑ましくもあり羨ましくもある。

「行こう。シノちゃん。インフィニットを倒すために！」

「それとイナさんたちに加勢するために。囚われの異能者たちを助けるために。ロメリアとルルはここで帰りを待っててね」

「うん。いってらっしゃい。おねえちゃんたち」

「ルルッ！」

ロメリアの頭を撫でて、ルルにはウインクを送った。

とりあえず、こっちの心配はしなくてもよさそうだ。メルのおじいさんもいることだし。

「よし、行こう！」

「急ぐね。今ならまだ間に合うかもしれないね！」

そう言つてテントから飛び出すメル。

あたしもその後を追って駆け出す。

「メル！ 本当に間に合うの?!」

「間に合わなければ意味がないね！」

「それはそうだけど……」

大群を連れて移動する以上、足並みを揃えて移動しなくちゃ意味がない。追いかけるあたしたちより進行速度は遅いはず。

けど、昨晩のうちに準備を整えて進行したとしたら何時間も先を歩いていることになる。

その時間差をあたしたちの足でどれだけ埋められるか分からないぞ。

「シノちゃん。こっちなね！」

「ほいさっ」

メルの後を追ってテントの間を駆け抜ける。

「こっちなね！」

「はいはいっど！」

テントの密集地帯をずんずん進んでいくメル。

そこは人が通るための空間じゃない。テントを固定する紐だらけの所を無理やり通っているに過ぎない。

「シノちゃん遅いね！」

「ご、ごめっ！ ちょっと待って！」

振り返ってあたしを呼ぶメル。

やはりメルの足の速さはとんでもないや。

なんとかメルの所まで来ると、そこはこの集落の裏手側だった。

メルの横に並んだところで大きな鳴き声が耳に響く。

「キュルルルッ！」

「うわっ！ びっくりした！！」

目の前には竜が数十頭も紐に繋がれてウロウロしていた。

アンリミテッドが飼っているのだろうか？

メルがそのうちの一头に飛び乗った。

「シノちゃんもラムダムヴァに乗るね！」

脚竜（きやくりゆう）ラムダムヴァ。全長2メートルほどの人に乗せて走る竜だ。

強靱で頑丈なごつごつした足が特徴で、名前のわりに温厚な性格をしているらしい。

二本の足で走るその姿は、ドラゴンというより鳥に近いかもしれない。

「これは…お高いものだね」

「なんのことね？」

以前、このラムダムヴァを行商の商人がとんでもない値段で売っているのは見たことがある。

それは一頭で小さな家を買えるくらいだった気がする。

「シノちゃんも乗るね！」

「う、うん…」

メルは隣のラムダムヴァに乗るように促すが、竜に乗るという経験があたしには無い。噛み付かれないか不安にもなる。

「の、乗り物酔いしないかなあなんて…」

「いいから乗るね！」

メルがラムダムヴァの毛を引っ張ると、ラムダムヴァはその

長い尻尾をあたしの体に巻きつけた。

「ひええ〜！ こ、怖い！」

「怖くないね！」

ラムダムヴァは尻尾だけであたしを持ち上げると隣のラムダムヴァの背中にあたしを乗せた。

「よ、よろしく」

恐る恐るその首を撫でると、ラムダムヴァは喉を鳴らして応えてくれた。よく人に慣れているみたいだ。

「よし。出発ね！」

「キュルルッ！」

走り出すメルのラムダムヴァ。

それに付いて行くあたしのラムダムヴァ。

いきなり加速するラムダムヴァにあたしはぎゅつと手綱を掴んだ。

速い速い。風を切って走るラムダムヴァの上は爽快だった。

あんなに苦勞して歩いてきた砂漠が嘘のように駆け抜けている。

目指すはインフィニットの城砦。西のウエストサンド宮殿。

これからこの世界にとって、大きな戦いが始まるうとしているんだ。

負けることは許されない。負ければアンリミテッドは滅び、たくさんの異能者が命を落とし、インフィニットはこの世界を我が物にしてしまうだろう。

そんなこと、絶対にさせるもんか！

気持ちを新たに、あたしはメルと共に一路西へ駆け抜けた。